

21-67

No. 9



二十世紀
新亞細亞

正五位勳五等安川繁成君序



大日本撫松服部誠一君著述

菁莪堂梓

從二位勳五等安川繁成君序

奇 想 此
闊 遠 天

奇 想 此
闊 遠 天

外來

明治二十一年四月題

如楓老婦言

二十世紀新亞細亞序

人文開闢世事豹變之速也真如活劇
脚色打扮愈出愈新不知所窮昨日誇
奇巧者今日忽屬陳腐難復博世人之
喝采而不唯是制度文物至學藝技術

可驚者最多矣。若以第十八世紀之眼，
觀第十九世紀之今，則其豹變果如何，
乎。必有開別天地之思也。人智活機
也。其步駁々不暫停滯，開拓蠻域而裁
出文華，刈除荆棘而運轉汽車，奇變妙

化世新一世鬼神之巧，亦將不及昔人
掩耳而怖者。雷霆也。今人不啻不復掩
耳，使用電氣以送信行車，其效用不知
所底止。頃者獨國理學士發明旱天降
雨之奇術，云人知之力，嗚呼亦非可驚。

乎。試想像第二十世紀之社會則如何。事物一變，世態遷移，又應開別天地也。於此撫松耶部君有新亞細亞之著書。余序君元富文材健筆自在巧寫二十世紀之想像，真揭出一大奇軸，使人有

恍然夢游于別天地，思空漠之天築斯樓閣者，蓋雖係一場剝筆，亦非吾人想像之所能及。世人許君以小說家之巨擘者，豈其過稱哉。至第二十世紀讀此書者，應必知非此想像之出於偶然也。

以余觀將來亦有斯想如此書亦是可
謂為人智誘掖之一針盤矣矧舞文縱
橫抑揚頓挫之妙兼刻紅剪翠鏤金錯
米之美乎惟使洛陽紙價頓貴者蓋此
書之謂也豈與尋常一樣如嚼蠟者可

同日而讀乎此種小說出而後可知文
學上之美術有益于世也明治二十有
一季三月於麻布飯倉之栴翠山房
正五位勳五等安川繁成撰



小此木觀海書



世紀十新亞細亞目錄

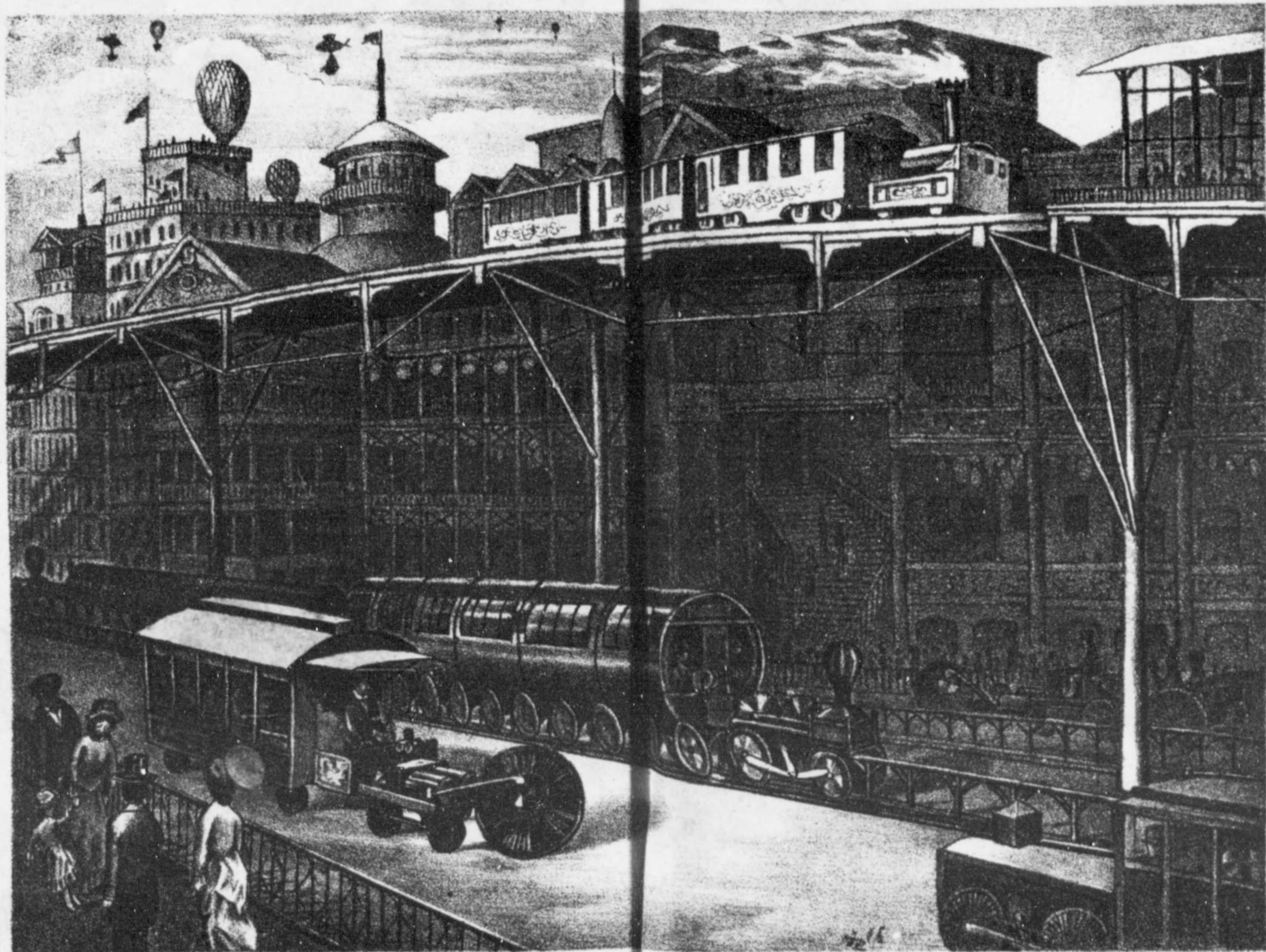
第一回	都府豹變して少女目を驚かし
第二回	事物進歩して賤奴辨を弄す
第三回	女權漸く振ふて衣裳亦變り
第四回	空船専ら行はれて徒歩甚だ少し
第五回	傳話線連つて遠く隔て、話を通じ
第六回	防火術巧みにして水なきに火を防ぐ
第七回	電氣車を馳せて市街を往來し
第八回	歐亞國を開ひて山水を賞玩す
第九回	北海邊に大新都府を開き
第十回	支那國に共和政府を起す

- 第六回
- 第七回
- 第八回
- 第九回
- 第十回
- 第十一回

電報新聞符號紙を發し
 香港空船氷菓子を送る
 調食會社新割烹を競ひ
 傳音器械演劇詞を傳ふ
 偶ま失火報を聞ハて奇術に驚き
 誤アて警報線を引ハて全家を驚かす
 裁縫技進んで瞬間服を製し
 歩虛館起つて空中宴を張る
 砲兵演習に空氣砲行はれ
 音樂競争に傳音器を評す
 宴會に招かれて時世談を聴き
 空船に乗つて煙火戲を試む

- 第十二回
- 第十三回
- 第十四回

政治研究所に俊才を育し
 演説講習課に辨論を教ゆ
 夏期試験に男女競争し
 外交問題に日魯抗論す
 官民相攻めて政治の腐敗を防ぎ
 男女互競して權利の伸暢を致す



景光ル極ヲ盛繁シ變一街市京東

世二記十新亞細亞

一名明治百年記

東京 撫松居士 著

○序辭

爰に余が本書を著述するに際し、偶然に余が思想を助けた
 る一事あるの癖あり。何事に拘らず未來の光景を想像すれば、
 腦裏の無形紙面に種々の奇異なる繪畫を摸寫し、隨て消ゆ
 れば隨て現はれ、宛かも眼界の幻燈の影繪を寫す鏡面の如
 く、自家も亦第二の鏡面に映るものなり、果して何物ならんか、
 現はれ出るを待つに堪へざるの思ひあり、故に想像心の最
 も強き時、過去の現在、物跡の却て朦朧として我眼界に入
 らず恍然として夢寐の中に在るが如く又顯然として百歳

の後に出るが如く、幾世を經過したるの思ひをなし、後ち夢
 始めて醒るが如きもの往々にしてこれあり、醒めて後ち夢
 寐の事を追想すれば、怡然として喜ぶべきもの、慄然として
 怖るべきもの、快然として樂むべきもの、啞然として笑ふべ
 きもの、憤然として怒るべきもの、潜然として悲むべきもの、
 或ハ慨然たるもの、或ハ奮然たるもの、皆な繪畫となつて無
 形の鏡面に現はれ、身ハ千種万様の畫額を掛け列ねたる、一
 種奇怪の室に居るが如く、獨り自から驚くもの、凡ろ幾回な
 るを知らず、此無形鏡面の繪畫ハ、獨り自から觀て樂むのみ、
 掲げてこれを人に示す能はず、又舉げてこれを人に説かば、
 必ず痴人夢を説くの誹りを免れず、然らば則ち想ふも亦益
 なし、寧ろ止むに如かざらんか、否々然らず、想像の力ハ人類

の最も貴重すべき力にして、人若し想像の力を失はば、一家
 の生活も營むべからず、矧はんや一國の政治をや、而して想
 像の力ハ人皆なこれを有し、唯だ想像ハ智識の反映たるを
 以て、その力に強弱と好悪の差違あるのみ、野蠻人といへど
 も必ず第二の戦ひに敵に打ち勝つて、財寶を奪ひ凱歌を唱
 へ、かゝるの想像を描くなるべし、然れども野蠻人の智識乏し、
 故にその想像の大なるものも、右等の想像に過ぎざるべし、
 若し夫れ此野蠻人の智識をして、數百歩を進めし、復々屈
 して人の奴隷たるを甘んぜず、寧ろ敵國を撃ち亡して、獨立
 國を創立し、再び穴居露坐の既往を説かず、益すく進んで
 金殿玉樓の壯觀を、その想像中に描き出すのみならず、終に
 は其實体を作り出すに至るべし

第十九世紀の人類社會に、文明の生活をなす我々が祖先の、
果して如何なる思想を抱きし歟、試みに之を追想せよ、實に
穴居露坐の中に可憐なる生活をなし、又ハ水草を追ふて處
々に移りし、漂然たる一の動物が種々の想像を描き出し、穴
居を出て、家屋を作り、遷移を止めて部落をなし、代々の子
孫益す、想像の力を強よめ、竟に今日の有様をなしたる
にあらすや、人若し想像の力なくんバ、社會ハ千歳を経るも
依然として、混沌の蠻域を出る能はず、唯たそれ想像の力あ
り、依て以て社會の進歩を致すなり、我れ獨り社會の財寶を
集めなバ、人必ず我富を妬むの心あるべきを想像せよ、人我
富を妬まバ必ず我に敵對して我富を奪ふの心あるべきを
想像せよ、已に我に敵ありと想像せば、如何にして此敵を防

くべきやを想像せよ而して此如何にしての疑問ハ、想像心
を惹き起すの大元素にして、何人たりとも常に此疑問を腦
裏に絶つ時の時なかるべし、我れ將た如何にして我富強を致
すべきやの疑問先つ起りて後ち斯くも謀りなバ能く富強
を致すべしと、想像の上にて想像を重ね其最も効益あるべき
想像を擇んで、これを實地に施すもの、乃ち制度とも爲り法
律とも爲り、果して想像の如く効益を奏するも、我々ハ未だ
以て満足すべからず、尙此上にも効益あるべきものを見出
さんとし、又々想像に想像を加ふるを以て、社會の進歩ハ窮
る時あらざるなり、想像力の貴重にして、且つ必用なるハ推
して知らるべし
古今事物の發明進歩ハ、皆な此想像の力に依らざるハなく、

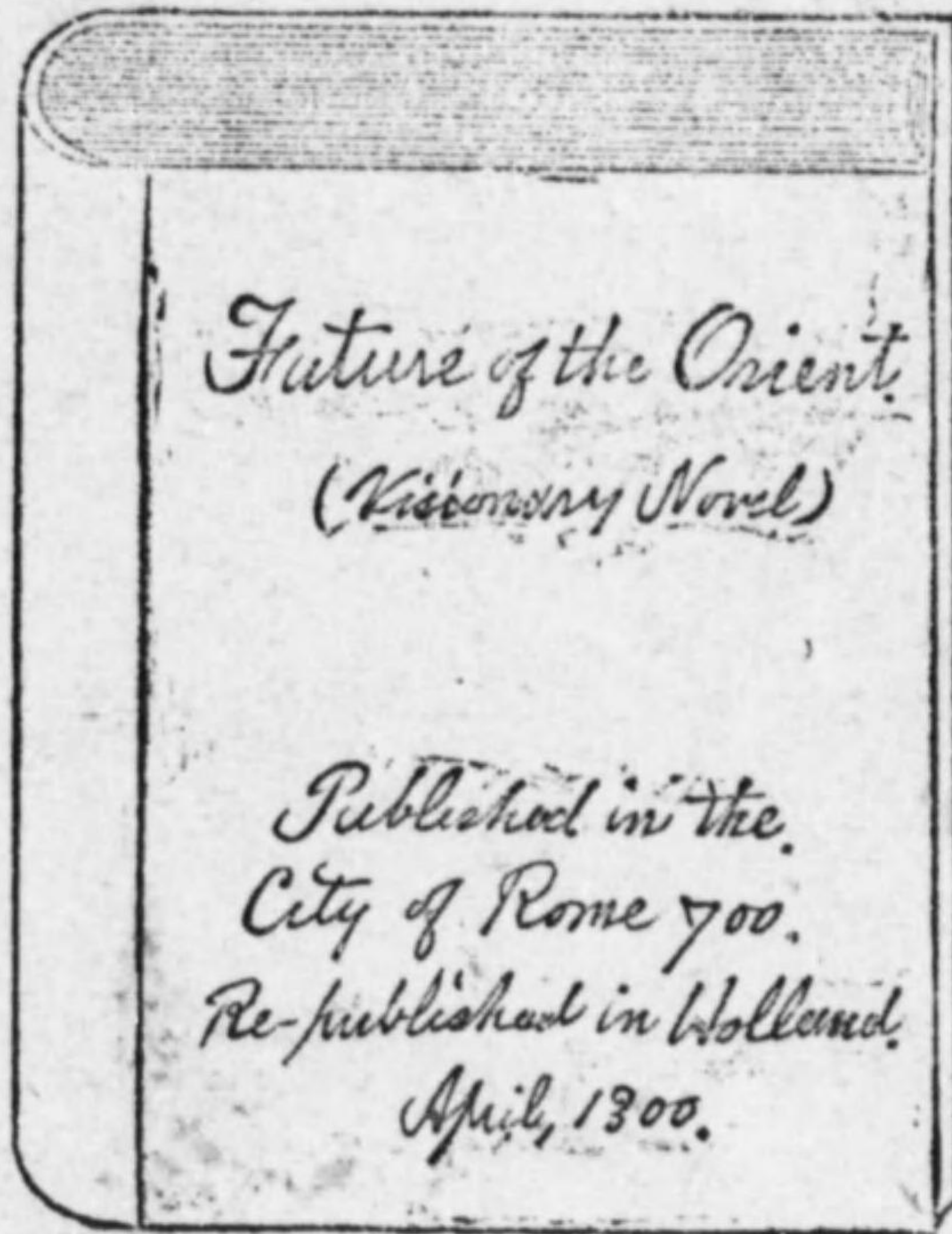
政事の改良、學藝の研究、器物の製造、地産の増殖、實に皆な想像の力に依り、畢竟するに社會の進歩の一に想像の力に依ると謂ふべし、何となれば想像なるもの何事に拘らず、皆な幾分か進歩の性質を含めばなり、故に空中に樓閣を築いて人に示す、兒戯に類すといへども、人の未だ想像せざる處に樓閣を描し出さば、人又これに想像を加へ、竟に有形なる樓閣を築き作すに至るべし、是れ余が敢て吾が癖を秘せず、本書を著述せんと決意したる緣由なり、然るに我々に先符合の感じあらしむる、實に奇なりと謂ふべきなり、二百十餘年前の祖先が、長崎奉行の職に就き、彼地に於て和

蘭人エム、オリノル氏なるものと親密の交り結び、屢に相往來して情誼頗る厚かりしをもて、オリノル氏が本國に歸る時、紀念の爲めに、て氏が愛玩せる物品數箇を贈り、久しく之を某氏の家に傳へたり、某氏の家の代々之を寶物とし、て秘藏しける中にオリノル氏の肖像を描ける油繪、又ハ氏が常に用ゐたる玻璃製の器物なともありて、當時ハ珍らしき品として人にも示めし、皆々稱美したりと云ひ、某氏に問ひば、少しく曇りを帯びて製造も亦甚た拙なれど、想ふに羅馬古代の品なるべしと、然るに星移り物換り、幕臣も四方に離散して、某氏の家も一時静岡岡に移りし時、價あるもの、皆な賣却なし、價なきもの、集めてこれを古櫃に投じ、門役の商

家に預け置かれしに、某氏の静岡の縣吏となり、それより處々に轉任して、再び東京に歸り、風と古櫃の事を懐ひ起して、其商家を尋ねしに其人さへ今は他に轉ぜし歟、居所さへも知れざれば、其儘まに打捨て置きしに、一日神田柳原の或る骨董店の前を過きり、思はず店頭を顧みたるに、我家の徽章を蒔繪したる、古櫃の片隅に横はり居るを認めたり、此の不思議なる事よとて、足を止めて近き觀れば、是れなん正しく商家に預けし古櫃なり、某氏も流石に昔しを慕はれて、振り捨て去るに忍びずと試みに其價を問ひ、僅か一圓にも充たざる價なり、某氏は直ちに之を買取り蓋を開きて裏面を看れば、髹漆の色ハ剝げはて、隅々ハ鼠に嚼じられ、底に塵に塗れたる、古本の五六冊散亂してありしのみ、想ふに此

は價没ければこそ存してありしものならんか某氏の携ひて家に歸り、その古本を出し看れば、何ぞ思はんその中の一冊こそ、オリノル氏が某氏の祖先に贈りたる品物中の一にして表紙ハ破れ綴糸は切れ文字も處々蠹魚に屠られしが、猶十の六七ハ讀み得べし、是れ余が本書を著述するに際し、偶然余が思想の大半を助けしものなり
想ふに此書は羅馬古代の碩學者が千歳の後に現出すべき、社會の有様を想像したるものなり、原著者の氏名年代ハ分明ならずも、某氏の所藏に係るものハ紀元七百年代に羅馬府に於て録刻したるものを、紀元千三百年四月和蘭國に於て再び翻刻し、紙面の淡黒色を帯びて、いかにも古るびたるものなり、文字は未だ鉛版の發明あらざる前に係り甚た

鮮明ならざるも、表紙にハ羅馬字を以て左の如く記載せり



七世紀の書籍の躰裁ハ甚た粗なるものにて、文章ハ諧謔躰を用ゐ、第七世紀の上ニ在りて、第二十一世紀の東洋社會に現出すべき

有様を記したる、一場の夢物語にして、捧腹絶倒すべき怪談甚だ多し、然れども驚くべき事も亦少なからず、其中最も重なるもの、端緒を擧れば

一支那帝國ハ二箇の帝國と、一の共和國とに分れたり、一の帝國ハ滿州に都し、一の帝國ハ韃靼に獨立して、勢力甚だ盛んなり、共和國ハ支那本部に獨立して、鼎足の勢をなせども、印度に起りし共和國と連合して、盛んに貿易を行ひ、なかに盛大なり

一支那共和國ハ朝鮮國に起りたる最も猛烈なる共和党と氣脈を通じ、朝鮮國をして共和國たらしめんと試み、窃かに共和党を煽動して、内亂を惹き起したれども、朝鮮ハ日本帝國に結んで緩かに過激党を鎮壓せり、然れ

とも人民未だ服せず、終に歐洲立憲國の制度に倣ひ代
 議政體を立てたるをもて、漸く治安を維持したれども、
 滿州帝國の露國と大葛藤を生じ、朝鮮の王政党窺かに
 滿州帝國に應援したるより、共和党再び氣焰を吐き、内
 亂屢々起りて治らず、王政党の終に日本帝國に倚りて
 聯邦の盟約を結び、總かに其獨立を維持したり、是れ實
 に紀元二千八百八十一年の事なりき

一 歐洲より東洋に向て大なる翅を伸べし、職として香
 餌を啄る大鷲ハ、西比利亞の山中に栖息して、人類に鬪
 鬪たる猿どもを逐ひ出し、其地は既に其領地に属せし
 かど、紀元二千百年の頃及び、猿の末孫ども窺かに隠
 謀を企て、數萬群をなして處々の山中に蜂起し、竟に鷲

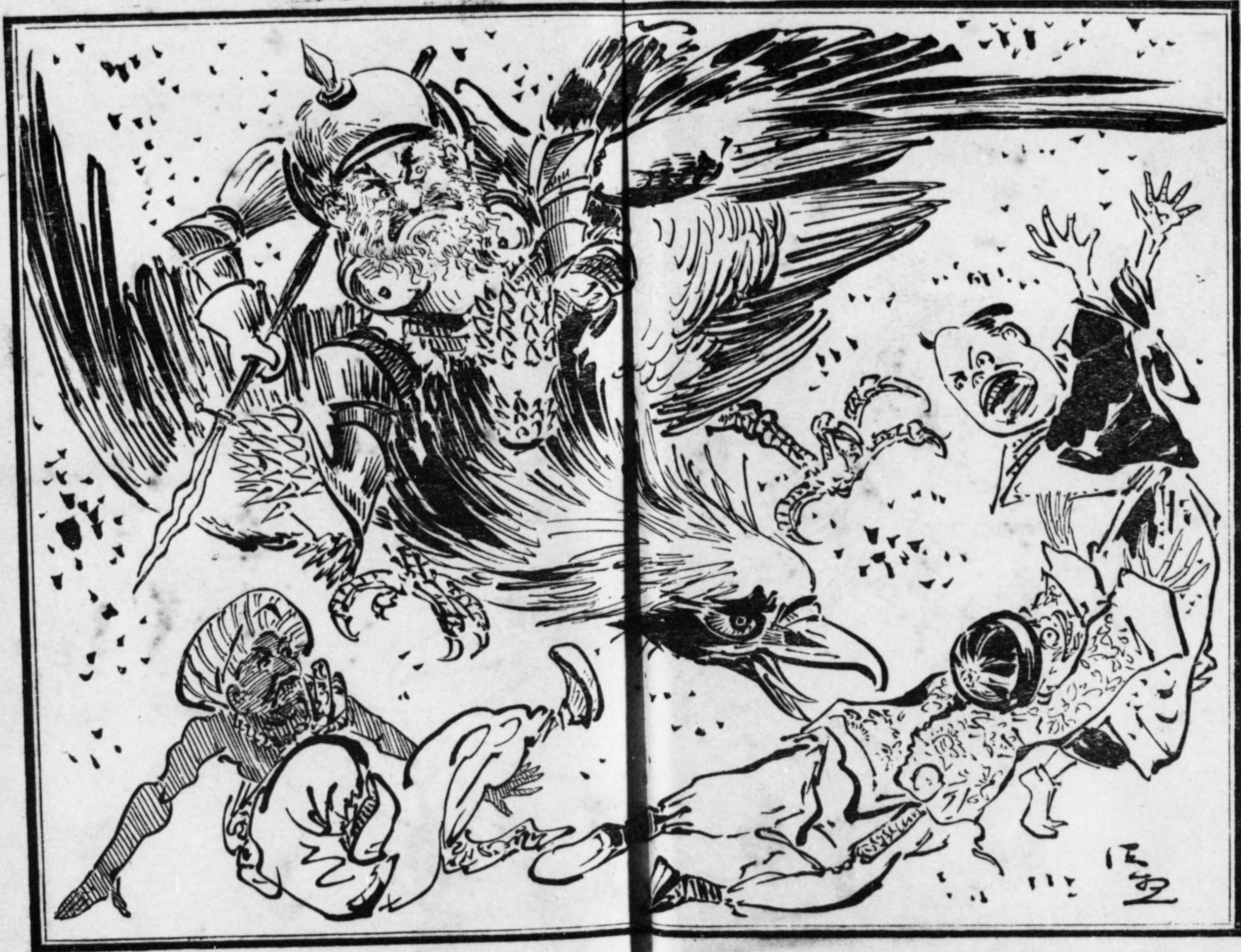
を逐ふて獨立の旗を翻へしたり、是れ猿の奴隸に終る
 を遺憾に思ふと、鷲の本領より配流されたる、虛無党の
 山野に出没して猿どもを煽動したると、曩きに鷲の爲
 めに亡滅したる、ポイランドの人民等日耳曼聯邦中の
 某々國に巢窟を構ひし、社會党と謀合して獨立を謀り、
 鷲の爪の重もにポイランドに向ひ居るとの三ツの者
 より起りし騒亂なれども、其氣焰の煩る熾んにして、虚
 無党の勢力如何に由りては、鷲の爪も折られまじとも
 云ひ難たし

一 印度の古代人民擧つて佛教を信じ種々の空像を拜し
 て、徒らに冥福を祈り、懶惰放逸の蔽に流れしより、東洋
 文明の嚆矢とも稱されし國にありながら、中古より漸

くに衰ひて、終に奴隸の苦界に沈淪し、歐州諸邦の食餌となり果てしは、十七八世紀の頃に甚しかりけるが、世の變遷の實に測るべからずして、今ハ白哲人種との交際甚だ親密となり著しく人種改良の好結果を現はし、天主教を奉ずるもの最も勢力を得て、佛敎ハ已に地を拂ふに至り、隨て又人民の氣力も奮ひ起り、遂に英國の支配を受けたる人民ハ、大革命を謀りて合衆政府を立てんとし、印度大守を暗殺したりとの大亂を起し、折柄英國ハ阿弗利加の領地に於て、同じく獨立を謀るもの兵亂を起すに際し、其氣焰甚だ猛烈にして數萬の兵を出し、戰爭數年間に及べども未だ鎮定せざるのみか、殆んど獨立すべき有様に、英國ハ奔命と軍資に疲れ、印

度に向て十分の兵力を出すと能はざるより、革命党ハ益す氣焰を逞ふし、遂に獨立の戦ひに全勝を收めて、一大共和國を創立したるは、實に奇事なりと云ふべし。一百兒西亞國ハ古代大帝國たりし影もなき、可憐の有様となり果て、小亞細亞ハ土耳其の爲めに奪はれ、纔かに帝國の名を存し、踰踏たる小國となりけるが二千二百年代に土耳其ハ再び露國と兵を構ひ、戰塵甚だ熾くなるに乘じて、印度の共和國と同盟し、辞柄を設けて小亞細亞の舊領を復せしかど、是れ亦劇烈なる共和党起りて、此下凡て七ペーシ程文字全く磨滅して讀み難し。一東洋の片隅に勇猛なる、此下支字磨滅す。此國ハ古より支那と交際を通ぜしかど、鎖港を國是として外交を絶

ち、偶たまま葡ポ萄萄牙牙人人の渡わた航航しありしと聞きく、頑ぐわん固こ(此下文字
 磨滅磨滅千八百年代に至り、遽たかに文明文明の位い地ちに進すすみ、二千
 百年代に至りては、東とう洋やう文明文明の魁きたるものとなり、物産物産
 繁殖はん殖殖して貿易ぼう盛いんに行たはれ、近きん代だいまでも、專せん制せいの最もも、此
 下文字磨滅下文字磨滅今いま純じゆん然ぜんたる立りつ憲けん政せい躰たいの文ぶん明めい國こくとなり、殊
 に朝鮮ちやうを聯れん邦ほう國こくとなし、又また朝鮮ちやう國こくの爲ために支し那な共きやう和わ國
 と兵へいを構かまひ、大たいいに勝しょう利りを收きめて支し那なを壓あつ服ぷくし、支し那な共
 和わ國こくの上海しやん地方ちほうを割さへて和わを請かうせしより、國こく勢せい益いす、
 振ちん興きやうし、且かつつ内地ないちも北ほく端たんに於たける荒かう蕪ぶの原げん野や、悉ことごとく皆
 な開くわい墾こんして豊ほう饒じやうの沃よく野やとなし、此こに一いつの大たい新しん都とを開ひらき、
 夏か時じに皇かう帝てい陛へい下か避暑ひしよを兼かねて駐ちゆう蹕ひつあるととなし、西
 比べ利り亞や地方ちほうの人民じん、及及び滿まん州しゆう帝てい國こくの人民じん、皆みな日にち用よう品ひん



を此新都市に仰ぎ、織物製造所の如きハ佛の里昂も及
 ばざるの勢いなり、又印度に於る新和蘭（此下文字磨滅）
 頻りに植民して海外領地も亦甚だ盛んなり、然れども
 （此以下文字磨滅し且つ何れの國なるを知るに由なし）、
 右の半ば想像を加へて意譯せしものなれば、誤謬も定めて
 多かるべきが千百年前に此大想像を下だし、殆んど的中し
 たるの感じあるハ、實に非常の大活眼と云ふべし、且つ書中
 數ヶ處に奇異なる滑稽畫を挿入したるをもて、爰にその一
 を撰寫して參考に供す、
 凡そ社會ハ一大劇場にして、世事ハ活劇たるに過ぎざれば、
 後世如何なる大變遷のあるべきや實に測るべからずとハ
 云ひ、國に盛衰あるにも拘らず、一般の文明ハ益す／＼進歩

すべきの道理あり、何となれば第二世紀の人智の第十九世紀よりも必ず幾ばくか進歩あるべきを以てなり、然れども一國の盛衰は古より海潮の如き有様を呈し、古代文明の鼻祖と仰かれたる支那帝國は漸くに文弱に流れて却歩し、印度の文明も亦全く衰へて社會の氣運は歐州に向て進歩し、初めは東洋より導きしものも、今倒まに東洋を導くの景状となり、真に海潮の來往に異ならず、故に西洋の文明は漸く東洋に遷り、東洋亦西洋を導くの反對を呈すべきに想ふに、今より數百年を出でざるべし、而して社會の變遷する毎に進歩すべきに、亦猶最初導かれたる西洋の文明の之を導きたる東洋に比すれば、遙か數等の上に出るが如きあらん、是れ余が本書を著はして遙に東洋人民を喚び起こさん

とすの縁由なり、然れども余は元と智識に乏しく、徒らに思想を渺漠たる百世の後に駛するのみ、豈に羅馬古代の碩學者が社會の大勢を看破するの活眼力あらんや、矧んや夢寐の中、描き出せし、想像の反影たるに過ぎざるや、人或は本書を罵つて云はんか、斯の如きの兒戯に見るに足らずと、余は此等の非難者に對し、徳義上毫も愧ぢざるのみならず、寧ろ此等の非難者を哂はんのみ、何となれば此等の非難者、余が夢想の如く、此社會をして大いに進歩せしむるは到底能はざる事となし、今の不満足なる社會に安んずる、最も愍然なる姑息人たるを免れざればなり、余は今の不満足なる社會に安んずる、最も善美なる文明社會に生活せしめんと欲す

るなり、而して此望みの吾人の皆な懐く所なるをもて、之を
有聲の活畫に摸寫するも、徳義上何の愧ぢかある、否な余の
本書を著述するに當り、勇氣は平日に十倍して、眼を遮る暗
霧を破り、足に纏ふ荆棘を刈り、濶然と新天地を開く、最も愉
快の感じあり、然れども今の不満足なる社會に安んずる者
の、猶余が想像を晒ふか否な

七ノ本ヲ讀マントスルモノハ生ワテ田尻ニ奴隷ヲ買ハシメテ三十七年ヲ以テスヨ

○第一回

都府豹變して少女目を驚かし
事物進歩して賤奴辨を弄す

爛熳たる白雲をもて、十里の堤を埋めし花も、今ハ残りなく
散りはて、春の残り香を暮ふ胡蝶さへ、何れへ去りしか影
だに看へず、緑りの陰に暑さを添ふる蟬の聲いとも喧し、
今は早や夏の半バを過ぎ、今年しハ梅雨の時節にさへ雨少
なく、早稲田の苗枯れもやせんかと、鋤把る人の昔しに變
らぬ、水掛論にて夜も寝ねず、我田へ水を引かんと争ひ、その
炎熱の酷だしきこと、華氏の寒暖計は九十八九度の間を昇
降し、焰々焔くが如しと云ふべく、坐ながら汗の流れて背を
滴し、幾日となく照り續きたる大陽ハ、茜色をなすまで紅へ
となり、風さへ死せしか檐端の鈴は、絶へて音せぬ程なれば、

汚水だも滯るとなく、又暴風吹き起るも道路に吹き揚ぐべ
 き浮動物なければ、絶へて一點の塵だも看るとなし、殊に水
 道の改良の著しき効益を奏し、寛の皆な鉄管となりしのみ
 ならず、第十九世紀に看し粗造の井戸など、今一も存す
 るものなく、水道に水道會社なるもの起りて、神田玉川兩
 水のの上流に、大なる蒸氣機關を据へて、凡そ三回砂漉しを
 して、始めて市街に通ずる鉄管に濁き入る、装置とし、一區
 内に三四箇所の大なる鉄桶を埋め、此桶より鉄の支管を
 連続せしめて、戸々の庖厨へ清水を送り、恰かも今皆な電
 氣燈となりたれど、第十九世紀に専ら用ゐたる瓦斯を引く
 が如く、汲桶や轆轤を用ゐて桶に汲入れ、肩に擔ぎなす
 勞を取るものもなく、如何なる暴風雨も濁らすと能はぬ清

人皆な熱に苦しみて、熱帯地方の炎暑でも、此上には出でま
 じと想ふ程なり、若し第十九世紀の昔にありなば、虎列刺
 など云ふ怖るべき悪疫流行し、夥多の人民を苦しめもま
 らんが、今人智の開けぬ十九世紀の有様、看ぬ世の昔し
 語りととなり、我東京の結構の天地一變の新大都會となり、家
 屋の建築の皆煉瓦ならねば堅牢なる石造となり、道路の
 到る處煉瓦と石材とを敷き詰めとしたる上に「セメント」を
 もて人造石の平坦なる道路となし、地下に英國倫敦にて
 幾十年の星霜を費やし、漸くに功を竣へしと云ひる大溝よ
 りも、一層大なる下水抜きを設け、直径六尺もあるべき鉄
 管を埋めて、これに直径三尺乃至四尺の鉄管を接続して、縦
 横に理められたれば如何なる暴雨降り續くといへども、一滴の

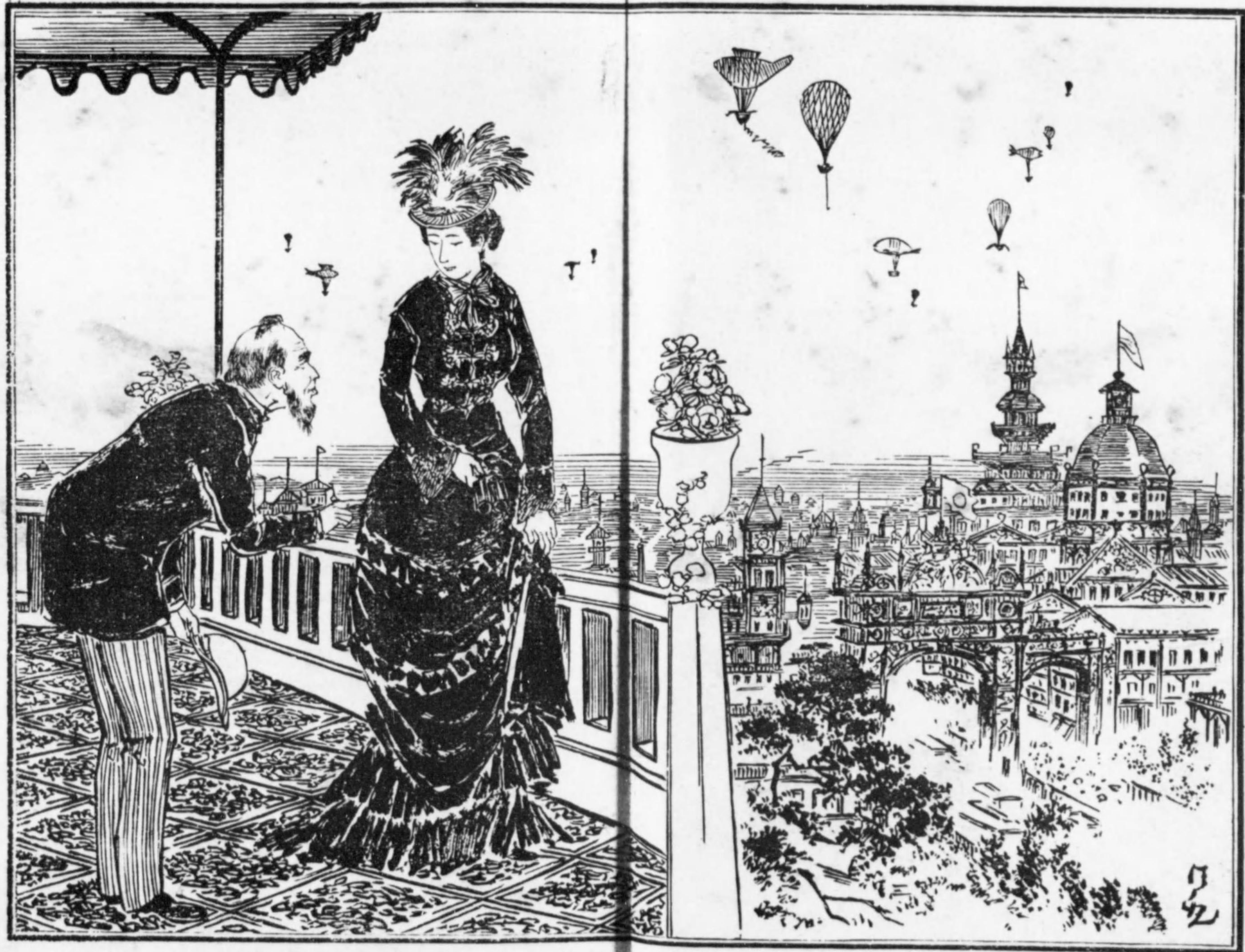
水を坐ながらにして充分に使用せらるゝとなり、又中央衛生會にて、市中の塵芥を毎朝必ず掃除して、品川の阜頭より遠隔の地へ運送することゝなり、市中の清潔なることゝ舊世界と比ぶべきもあらず、殊に舊世界にて、裏店とて貧民の住居するもの、都會の中央にも一の社會をなし、擔傾き壁破れたる牙房幾棟ともなく建て連なり、中等以上の生活に衛生てふ事も行はれ、勉めて不潔を避るの法方をも設けしかど、此裏店社會の一種陋隘の生活をなし、悪疫などの流行の概ね此貧民より醸もしたることにてありき、今裏店とても木造りの家屋はなく、皆煉瓦をもて建築し、路次といひるものさへ路幅を廣げて、不潔物の狼籍として健康に害ある臭氣を發するなごの絶へてなし、去れば裏住居と

は云ひ、家税も舊世界の裏店に比べなば五六倍も昇りしより、多くの大商店に通勤する管店などの住居するとなり、工夫や勞役者の力にも堪かねしより、此等の賤民の一人も都會の中央に住居するものなく、隨て衛生法も亦自から行届き、今年の如く炎暑の酷だしき年にても、絶へて悪疫に感染したるものなきに、亦人智の進みし一端と云ふべきなり、左に去りながら、熱に苦しむの昔も今も同じことにて、夏期となりては、皆な市街を離れし別荘に暑を避け、殊に水邊の風を追ふて、墨水の頭りに來るもの甚た多かりき、頃しも明治と云ひる年號も漸くに數を重ね、六十八と云ふ年の夏に、てありけるが、都下にては有名なる紳商と呼ばれ、舊と牛込の神樂坂に本邸を構ひ、日本橋區の大傳馬町に、盛大なる

著者云く、北京と云ひるハ明治四十六年に、北海道札幌に
 開きたる新大府にして、第十九世紀にハ開拓官をも置
 き、頻りに人民の移住を勧誘せられしかど、當時ハ人民の
 思想甚だ狭ふして、北海道と云ひば熊羆の居る處、豺狼の
 叫ぶ處なりとして、移住するものハ甚だ稀れなる有様な
 りしかど、第二世紀となりてハ、日本人口の繁殖たると
 ハ實に驚くばかりにして、第十九世紀の終り乃ち明治二
 十年頃の調査に據れば、全國の人口三千八百萬に過ぎざ
 りしが、年々増加して明治五十年の間ハ、五千七百
 萬の多數に上り、内地にハ最早開拓すべき餘地もなく、印
 度諸島の中へ植民地を開き、此に無産の賤民を送りたる
 程なれば、北海道の如きハ著しく人口の繁殖を致し、今年

商店を開き、専ら支那朝鮮より比耳西亞等の國々を貿易通
 商を業とせる金岡氏と云ひる人なり、此人ハ男女二人の子
 ありて元とハ北國より出でしものなりとて、二人の子ハ久
 しく故郷の親族に託し、地方の某學校に教育せられ、兄ハ成
 美と喚び、倣して十九年五月間月となり、妹ハ静江と喚び、倣し
 て十八年となりし時、某學校にて卒業の免狀を得たりしか
 バ、今より東京に出で、何なりとも事業を營まんか、又ハ北
 京にハ聖天子も御駐輦の時節なれば、山陰道より北越への
 鉄道にて秋田より青森を経て北京に趣かんか、兄弟二人ハ
 心を二筋に迷ふて決し能はねば、東京なる父母へ問合して意
 見を聞かんとして、中央傳話會社の支社を設けありし、越前敦
 賀に到りて東京の父母へ問合せの談話を送られたり、

の調査にて、一千餘萬の人口となり、復た荒蕪の原野を
 看ざるに致り、殊に支那帝國の滿州に分立してより支那
 本部との戦争の數年に亘るも未だ鎮定せず、此帝國等
 専ら我が北海道と貿易して生活をなすの有様なりしか
 ば、今や北海道の盛んなると、恰かも北米合衆國の桑港が、
 僅に二三十年にして大都府をなしたるが如く、内地の豪
 商の大概支店を出さざるものなく、又東京灣の改築あり
 てより、内外の商船の皆な東京灣に乗り込み、築地芝浦よ
 り高輪邊まで各國の商館をもて填め盡くし、横濱港の大
 いに衰微して纔かに外商の別荘を残すに過ぎざる有様
 となりしかば、横濱の豪商等、争ふて北海道に移住し、小
 樽港の繁昌なると、誠に横濱の始めて起こりし時も斯く



少女家ニ歸リ老僕ニ東京一變ヲタルカテ驚ク

やあらんと想ふ程に、一大良港をなすに至り、隨て札幌の
 繁昌ハ云ふばかりもなく、遂に明治五十六年の國會に於
 て日本第二の都府と定められ、北京と名稱を下だされて
 東京に次ぐの都府となり、人口も七十餘萬に及びしかば、
 明治六十一年に皇宮の建築ありて、天皇陛下にハ毎年夏
 期にハ御行幸あらせられ、炎暑の中ハ御駐輦あらせ給ふ
 ことハなれり
 第十九世紀にハ急報と云ハバ獨り電信の力に依頼するよ
 り外ハなかりしが、今ハ傳話會社とて理學博士が幾回か改
 良を加へて輕便なる新器械を發明し、東京にハ私設に係る
 傳話會社の數十二箇所に及びたる中にも、往復傳話會社と
 云ひるハ、東京の中央なる日本橋の傍らにて、舊と魚河岸と

唱ひし處に七層の樓閣を築き、第十九世紀に東京第一の建
築と稱されたる、第一國立銀行とて、僅かに二百萬圓許りの
資本にて、銀行營業を爲したる一會社の樓閣ありしとて、今
猶其撮影の存するものに比べなば、凡そ二倍半の高さもあ
りぬべし、去れども第二十世紀の今日にて評するとき、そ
の建築壯大なりと云ひ、未だ私立銀行の大なるものにも
及ばざれども、専ら實用を旨とせしものなれば、會社の區域
の廣大にして全國到る處に支社の設けなきは、なく、傳話線
の架設ハ蜘蛛網よりも密にして、千萬里を隔て、談話するも、
相對して語るに異ならず、近頃又支那共和國と同盟して、海
底傳話線の設けあらんとす、此發明ハ佛人ポード氏の究理
上より得られたる結果に係り、佛國と英國との間に此試験

を行ひ、既に好結果を得られたりとして、歐洲にてハ此法漸く
に行はれ、此傳話線の設けあらざる處なし、今日は乘雲船な
るもの大いに行はれ、佛國巴黎の如きハ人皆な馬車を廢し
て乘雲船を用ひ、最下等の貧民にあらざるより、復た地上を
歩するものなく、空中を縦横に飛行する乘雲船の夥しきと、
宛がら群鴉の亂れ飛ぶが如く、空中に盜賊出で、空中警察
を設けし程に盛んとなり、大太平洋乘雲飛脚船會社起りて、歐
州と米國との間に定期往復を開きければ、蒸氣の力を藉て
一時間に僅に百里内外を走る火輪船を迂なりとして、絶へ
て乘船するものなく、英國にて有名なりしと聞きつる「ピア
郵船會社」も今ハ東洋への乘雲飛脚船會社と變じ、昨年英國
と佛國との海天蒼々たる中空に、乘雲船競争を行ひたりと

云ふ程に空中の往來自由となり人類も又飛鳥に異らざる
 時世となりしかど人に疾病の患ある何れの時世にても
 免れ難く斯く千里の天を一瞬間に往來する新世界となる
 も坐して千里外の人と對話する傳話器の要欠なく能
 はすして全世界皆な此設けあらざるなし第十九世紀に
 行はれしとか云ひる傳話器甲の地と乙の地の間に架
 設したる一條の鉄線やうのものにして、纜かに數言の談話
 を傳へたるに過ぎずして今日行はる傳話器の如く神速
 にして且つ輕便なるものにあらず、電氣の効用日に月に進
 歩して第十九世紀に蒸氣力を藉りて運轉したるもの、今
 日皆な電氣力の代りて働く所となり電氣の効用に依りて
 幾千丈の深さある渺茫たる大海の底を旅行し得らるべき、

一種の船体を發明するに至り、此船は第十九世紀に迂遠な
 る甲鉄艦などを浮べて海上に戦ひたる時敵艦を打ち碎き
 たる水雷火船の形ちに髣髴たるものにて、宛かも大いなる
 卷莖の形ちの如く最も堅牢なるものにして、如何なる物体
 に衝突するも破壊するとなき、殊に驚くべきはその速力に
 して雪山の崩るゝが如き怒濤激浪の底を自由に馳せ行く
 こと、舊蒸氣船の速力に比すれば、一秒時間に十英里と五英
 哩との大差ありと、頃日此電氣船に乗り北亞米利加より大
 平洋底を経て、歐州西部の海底を巡行し、地中海より印度洋
 を経て我東京灣に來れる米人某氏あり、氏が全世界の海底
 旅行を企て、東洋に來るまでには、凡そ四箇月の日子を費やし
 やしたりと、或る人これを聞き意外に多數の日子を費やし

たるの甚だ訝かしとて、親しく某氏に尋ねたる談話なりとて、東洋新聞第二萬七千二百二十號に記載するを看るに、氏の海底にて地理並に動植物の穿鑿を密にしたるが爲め、斯く多數の日子を費やしたれども、唯一周するのみならんに、三十日を費やさずして全世界の海底を一巡し得らるべしと、氏が實驗に據れば、太平洋中にて新たに發見したる魚属の數は、一萬餘種にして、歐洲の博物館にも未だ陳列せられざるもの二千四百餘種あり、又海獸の數も驚くべき程にして、海草の種類に至りては算ふるに追まあらず、殊に奇觀なりし、奇望峯の近海にて、海中の大瀑布を發見したるの一事なりと、此瀑布の潮流の激動よりして直下するものにて、高さ三英里もあらんと想はる、大海山の暗礁の巉巖たる

處に懸るものなり、その周圍の總べて奇々怪々なる形ちをなせる暗礁をもて築かれ、礁上には珊瑚質の樹木鬱葱とし、繁茂し、樹間に工の手にも染め出だし難き種々の色を呈する美麗の海草をもて着飾し、恐らく瑞西國の好風景も及ばざる程にて、殊に驚きたるは大珊瑚の林をなすものありて、海水爲めに紅色を帯びたり、去れども此珊瑚林に到るに、頗る峻岨なる處を攀ぢされば、達する能はず、且つその邊に、頗る長さ二丈もあるべき大鯨群をなして、動やもすれば人を害せんとし、容易に跋渉する能はず、氏の海底銃獵にも慣れたるをもて、纒かに珊瑚林の麓に達し、一箇を伐り獲たりとて、親しく示されたるを觀るに、長さ五尺餘のものを二ツに切斷したるものにて、數箇の枝に分れ居れども、幹と覺

ぼしき處の直徑五寸に近く、實に古今未曾有のものなり云々、と、噫、第十九世紀の舊世界を顧れば、空中飛行の便利をも知らざるのみならず、海上の進航さへ往々風波の爲めに船を覆へされ、果して海底に如何なるものあるやも知る能はざるに、今、海底の旅行さへ自由自在となりし、人智の進歩も亦驚くに堪へたりと云ふべし、然れども、今を距る二百餘年前、フランクリンなる大博士出で、電氣の發明なりせば、今日の如く電氣の効用をして著大ならしむること能はざるべし、此効用に至ては、第二十世紀の我々といへども、偏へにフランクリン氏の賜ものとして謝せざるべからず、實に傳話器の効用をして益す、神速ならしめたるも、亦此電氣の力を藉りたるが故なりき。

〇第二回

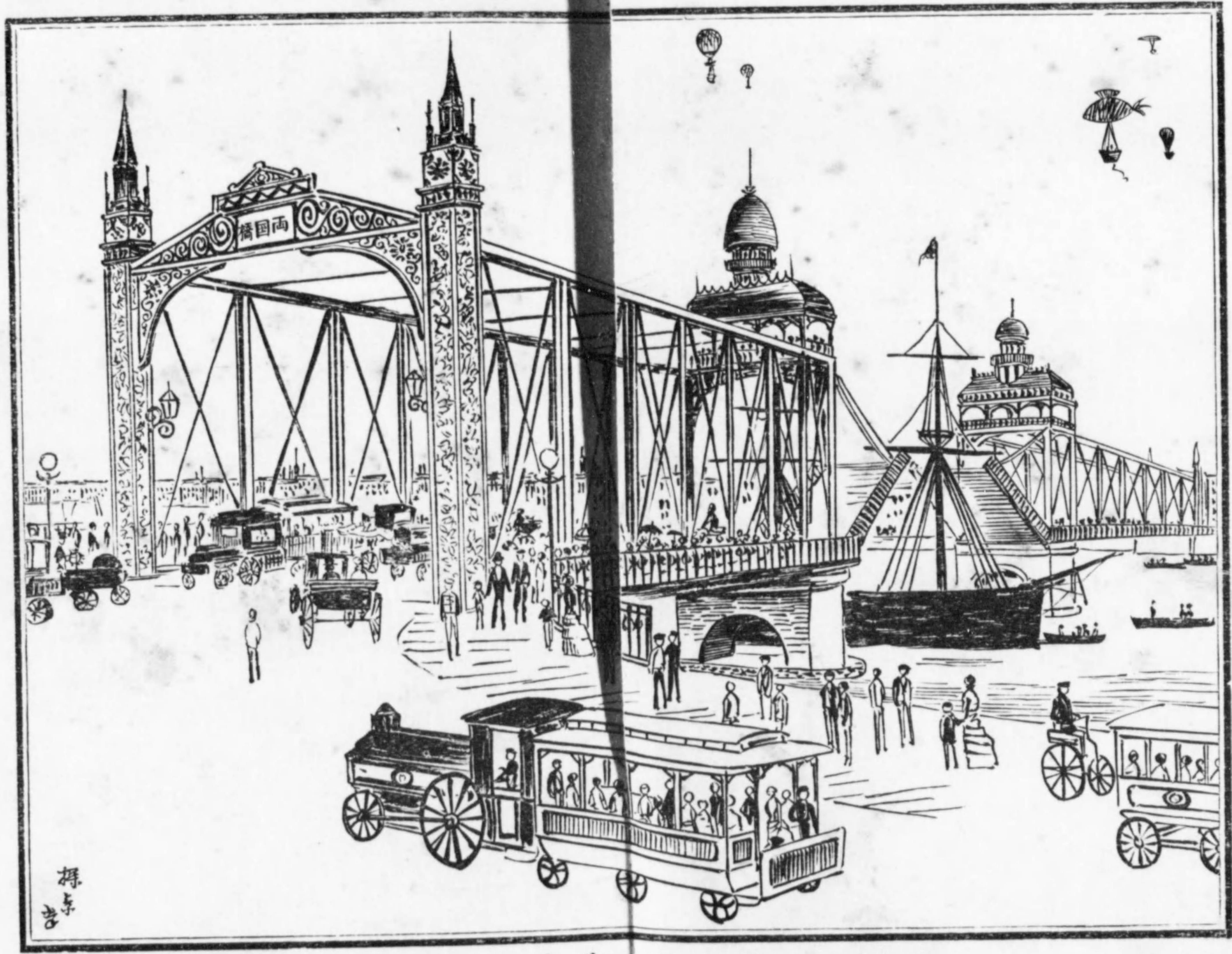
女權漸く振ふて、衣裳亦變り、空船専ら行はれて、徒歩甚だ少し。

扱も金岡兄妹の敦賀の傳話會社の支局に到り、東京なる父の許へ一身進退の問合せをなしたるに、忽ちにして父の聲として、回答ありける、兄成美、直ちに北京へ赴ひて、商業に従事せよ、静江、一先づ東京へ歸るべしと、成美、固より北京へ赴くの念なきにあらざれども、彼地に於て何商業を營むべきや、唯だ北京へ趣けとのみにて、分明ならずと再び問合せをなしたるに、北京へ頃日金岡銀行の支店を出せしをもて、指し向き、此支店へ趣くべしとの回答なりしか、父、爰に兄妹の袂を別ちて、成美、北越への鉄道に乗り、静江、東京へと歸りけり。

金岡靜江の四谷より小石川に分る、市中鉄道に乗り移り、牛込なる停車場にて車を下り、牛込神樂坂なる家に歸らんと、坂下まで到りて看れば、七八年前までの小商人など店を連ねて、なかくに繁昌の場所なりしに、今昔の面影もなく、車さへ通行の儘まならぬ坂なりしに、何時切り開きたるにや、小日向より音羽へ通ふる道路の平坦となりて、凸き處さへなく、昔の市塵なりし處も、今五層六層もあるべしと想はる、高樓を建築して美麗なる庭園の煉瓦の高塙や刈込みたる枳殻の活籬にて境をなし、何人等の住居するにや、建築さへ、美を盡くし、道路なども清らかに洒掃して、一點の塵だもなく、往來する人々を看るに日本人あれば、白人人もありて、人種に異同もあれど、衣裳の美麗と云ひ、品格

の高尙と云ひ優り劣りのあるべしとも想はれず、殊に靜江が幼年の頃、稀れに日本の古風を慕ふものありて、婦人などには袖の長き和服とか云ひるものを着け、幅廣き帯を纏ひしものありつるが、今絶へてその影もなきのみならず、歐洲にて流行せる新様の衣服の早くも東洋にまで行はず、歐洲にて流行せる新様の衣服を着けざるはなし、歐洲にても第二十九世紀の初めまで、婦人の服と云ひば必ず幅廣き袴を腰に纏ひ、裾の地に拖きたるものにてありしかど、男女同權の説漸く實地に行はれ、婦人も亦官吏となりて政治に與るととなりしより、婦人の氣風を一變し、勉めて男兒と同一の位置に立たんとし、隨て婦人の事業も益す、戦争に當り婦人に

党にて義勇兵を募り、頗る猛勇を顯はしたるより、婦人の勢
 力一層盛んとなり、此義勇兵の首領と仰がれたるボンチス
 夫人の、主として女風の改良を唱ひ、妾等既に男党と權を
 同ふするに至りて、衣服までも男党と同一にするこそ至
 當なりとて、古いより用ゐ來りし幅廣の袴の斷然と廢し
 て、男党の衣服に似たる一種の新様服を製し、唯だ男服と異
 なる所の裝飾の美麗なるのみにして、事業を執るものに
 最も輕便なりとし、歐洲大陸の争ふて此新様を學びたるよ
 り、我日本にても早く此風を輸入したるものと想はれたり
 静江の此等の有様に驚きながら、父の家へ何くにやあらん、
 或は他に轉居せしかも測られず去りて、敦賀への回答の
 牛込よりとあれバ、此神樂坂の上に住み給ふに相違ある



揮
筆

兩國大鐵橋開飛脚船ヲ通行ス

まじけれど、斯く坂さへ平らとなるまでに變りしからに、
舊の家にあるまじと唄を忘れし雛倉の樹林に迷ふが如く
にて、那處此處と尋ぬる折りしも、今ハ徒歩にて往來するも
のハなく、皆な電車若くハ新發明に係る自轉馬車と唱ふる
ものに乗りにて往來なす人々に、前後より狭まれて、左へ避け
んとすれば右より馬に策つて馳せ來り、右に寄らんとすれ
ば右よりも車を轉じ去り、徒だ迂路くとして躊躇するの
み、中にハ静江を顧みながら、往來に迷ふて車の間を徒歩す
る少女ハ、容貌こそ麗はしけれども、想ふに發狂せしものな
らんか、看るも氣の毒なりと笑ひ去るものさへありて、静江
ハ殆んど困じはて、或る門前に佇立して、思はず鉄にて築き
し表門の柱に掲げし表札を看れば、金岡とありて正しく我

家なりしかと、煉瓦にて建築したる五層の高樓の、兩三年前
 に新築したるものにて、舊の家との全く形ちさへ異なれば、
 静江の看誤りて他人の家と思ひしも無理ならず、静江の我
 家と知りてから、兩親に「さうかし待ち見びてありつら
 ん、十餘年経りにて兩親の顔を見るの嬉しさに、門前より玄
 關まで、僅か一丁にも足らぬ距離なれども、心の急がれた
 るより十里も隔たりし程に想はれ、足を速めて玄關に到り
 て看れば、此のいかに寂寥として人影もなし、静江の餘りの
 訝しさに暫し玄關に立ちたるまゝ、呆然としてありける
 時、從僕へ來客ありと想ひて出で來れば、麗のしき處女の行
 み居たるに驚きたり、此静江と云ひるの天性の麗質を具へ、
 明眸皓齒にして、姍姍たる容貌の、芙蓉の半ば綻びて露を合

めるが如く、眞に絶世の好標致なるにも似ず、衣裝の質素な
 ると云ひ、舉動の鄙風なると云ひ、今時の婦女子が意氣活潑
 にして、衣裝の華美を飾れるに比べなば、殆んど別世界の人
 かと想ふ程なれば、抑も是れ何人ならんか、訝かしき風態な
 りと、言葉も出さず、静江の顔のみ打守りてありけるに、静
 江も今は黙しかね、恨みを含める聲を發して、父君や母君に
 「何れにおはし給ふにや、妾の静江にて侍るものを、今日し
 も歸り來ると書柬をも送り置きしに、何とて待ち給へぬに
 や」と云はれて、從僕へ尙も不思議の顔色をなし、芳卿に「阿
 嬢にておはせしか、今日しに歸へらせ給ふとのとなれば、一
 箇の蒼頭の今朝乘雲船を飛ばして、甲府の停車場にて迎ひ
 まへらすとのとなりしが、阿嬢に「乘雲船を看ざりしかと、

問はれて静江の打ち驚き暫し首を低れて言葉もなく何をか案じて居たりける
 其やありて静江の首を擡げ言葉も忙はしく甲府にて空船が下りしとて人々物珍らしく語り合ひしに妾を迎ひの船にてありつるか妾の東京より来るものとは想はず甲府にて何人か戯れに飛ませしものかと思ひしに眞に空船にて妾を迎ひんとし餘まりとの危険の事にこそ妾の假令ひ迎ひの船なりと知るも空船に乗りて四十里も飛び来らんとし思ひも寄らず若しも途中にて暴風に遇ひなば船の忽ち吹き飛ばされ身は蒼空より幾千丈ともなき地上に墮ち密塵となつて碎けもせん斯かる危険なる事避るこそ好からんと云ひば僕は何の答ひもなさで頻りに晒ひける静江

の主人の阿嬢に對し無禮なる奴輩なりと思ひば涼しき眼に眼りを含みて聲を高らめ汝は何を晒ひしや無禮の事よと詰りければ從僕阿嬢に愠り給ひしか奴は思はずも禮を失ひたり宥るし給ひと懇に謝しつ僕の話る所を聞けバ阿嬢に久しく地方におはし給ふとの云ひ學業を卒ひて歸らせ給ふに乘雲船を見て危険なりと云ひ給ふの可笑しさに思はず晒ひを催ふしたり今東京にて空船に乗らざるものなく至急を要する事件に皆な空船にて往來するとなれり阿嬢の眼に看へ給はぬが下坊の天に驚きの舞ふが如くに看へるもの皆な空船なりと云はれて静江の驚きながら顧みて東方の天を望めば果して幾箇ともなく空船の飛行するを認めたり去れども静江の猶空船ハ

危険なるものと思ひ、疑ひは未だ解けやらず空船にて往來
 したらん、に鳥の羽翼を借ると一般迅速に往來もなし得
 べきが覆へりて地上に墮ることなしと云ひ難たし斯
 る危険を冒かして一秒時間の遅速を争はんより、妾の事
 安穩なる人車を馳せ去らんと云ひば、僕も又もや失笑して
 止まざりき、静江の従僕にさへ侮りを受けしと思ひ、今
 花をも欺くばかりの好顔に、朱を濺ぐまでに憤ふり、汝の妾
 が危険を避けんと云ふを笑ひしか、如何に時世は變り人智
 の進みしとて、一身の安危をも省みぬと、心得ぬ事ぞかし、
 汝の生命の貴きを知らざるかと、言葉鋭く詰りければ、従僕
 の漸くに笑ひを止め噫々阿嬢に、是れしきの道理さへ悟
 り給はぬか、時世彌よ開けて人智の進むに隨ひ、衛生の法も

亦行届き、倍す生命の貴きを知るべきが當然なるに、豈に求
 めて危険を冒かすもの、あるべきや、阿嬢にも少しく考ひ
 給ひなば、此等の道理は悟り給ふべきに、云はれて静江の
 尙も疑ひを増し果して然らん、に空船に危険の憂ひなし
 と云やるのか、海上を行く船さへも危険を免れ能はぬに、知
 して空中を飛び行く船の危険なしとは、信ぜぬと云ひば、従
 僕も又もや晒ひ、阿嬢に、さして、悟りの悪しき方にてお
 はしけるぞ、阿嬢に、今の空船も昔し語り聞きつる舊世
 界に行はれたる者の如く、行かんと思ふ處にさへ行くと能
 はぬ粗造のものと思ひ給ふにや、今の空船は海上に浮べた
 る蒸氣船と云ひるものより尙幾倍か安心なり蒸氣船の暗
 礁に乗り上るか、又ハ颶風の爲めに覆へされなば、船体の碎

くるか將た沈没するか、乗込み居る人々の、大概魚の腹に葬らるゝの危難あり、今の空船然らずして、改良に改良を加へ、精巧に精巧を積みたるものなれば、東西南北何れに行くも自由自在にして、昇るも降るも又意のままになし得べし、殊に巧みなるハ萬一暴風の爲めに覆へされ、又ハ相衝突して地上に墮ることあるも、決して生命を失ふの危険なし、阿嬢にハ未だ知り給はずや、近頃鳥の羽翼に均しきものを發明して、空船に乗るときハ人皆なこれを腰に纏ふこと、なりしを、此羽翼に等しきものハ、地上を離るゝこと、六尺の距離さへあらんにハ、空氣を含んで忽ち開くの機關なるをもて如何なる岸石の上に墮るとも、恰かも鳥の飛び下るが如く身体輕ふして傷害を被るとなく、又水上に墮るとも、水禽

の浮ぶが如く決して溺るゝの憂ひなし斯ゝる新發明あれバこそ、空船に乗るハ地上を歩するよりも危険なしとて、我が東京にも日を追ふてその數を増し、其價ハ甚た貴ふして上等なるものハ、御者ども僅か三人を載するものにて一萬圓に下らず、去れば上等空船を所有するものハ、猶は甚だ稀れにして、多くハ空船會社より、一時間幾何くと云ふ賃銀を拂ふて備ひ來ることとなり居れど、今より數年を出てずして、人皆な馬車を廢するに至るべしと、説かれて靜江の驚きハ啻だならず、徒だ聞く言毎に呆れはてたる顔色にて居たりける

○第三回

傳話線連つて遠く隔て話を通じ
防火術巧みにして水なきに火を防ぐ

凡そ時世の變遷の測り難たしと云ひ、斯くまで人智の進歩またらんと、夢にだも想はざりし静江の身の、全く別世界に到りし心地して、暫バし呆れて居たりしが、去るにても父君や母君のおはさぬの訝かしと思ひ、父母の何れに往き給ひしと問ひ、今年炎熱酷だしとて、數日前より墨陀の別荘に暑を避け給ひども、父君に支那本部の共和党が、朝鮮に迫りて王党を倒さんとし、今しも劇しき戦争ありとて、何か評議の事あるにや出て去り給ひ、夫人に政黨の争ひ起り、爲めに奔走し給ふとのとなれば、今頃必ず別荘におはし給ふや、定かに知り難たし、阿嬢に暫く休息し給ふべし、奴の問ひまへらせんと云はれて、静江の押止め、妾も久し經りにて東京に歸り、未だ道路にさへ慣れざれば、汝の

妾を誘ひ去るこそ好かるべし、向島への誰なりとも備ひてよと、云ひば従僕へ又も解せぬ顔色をなし、阿嬢に人を備ふて何事を命じ給ふにや、静江汝の向島の別荘に至り、父君等のおはすや問ひまへらせんと云ひしにあらすや、従僕いかにも問ひ合せんと思ふたり、静江去ればこそ汝の代りに誰なりと備ふて向島へ遣はせよと云ひしなりと、云はれて従僕はエーと驚きながら阿嬢には是れしき事にて、も人の脚を借らねば、往復がならぬと思ひしか、去りての餘りに世情に暗らしとて、人にも晒はれ給ふらん、少しく注意して物を云ひ給へよ、奴の直地に問ひ合すべし、此處に來り給へよとて、一室に誘ふが儘まに到りて看れば、種々なる器械を据へ置きて、數條の銅線を架して、そありける、静江の何物な

るやも知らざれば、從僕の爲す様を見てありけるに、從僕の
 傳話器を把りて阿嬢に、恙かなく着京したり、主公に別
 莊におはし給ふやと云ひ送れば、忽ち別莊の從僕より回
 し来るに、主公にも夫人にも不在なれども、阿嬢が歸り給
 へ、迎ひまへらせよと云ひ置かれたり、直ぐに別莊へ誘ひ
 まへらすべしと、從僕に此返答を得て、主公にも夫人にも只
 今不在なれども、程なく歸へり給ふべし、阿嬢に是れよ
 り別莊に至り給ひよと、云はれて、イザと室を出でんとする
 時、器械の鈴の音一聲、チーンと響くより早く、何くよりか人
 の聲にて左の數語を送りたり、

只今本町三丁目なる調食會社の庖厨より火を失したり、
 火勢甚だ猛烈なり、



ス感ニルナミ巧ノ術火防ツ且キ聞ヲ報警ノ々種夜深女少

と、静江の大いに驚きて、本町三丁目とありて、父君の商店
 に近き處にあらん、汝の今より馳せ付て防火の助手をなせ
 よ、妾も氣遣はしければ急ぎ商店に至らん、早く馬車なりと
 も情ひ來れと、足踏みして從僕を促がせども、從僕も驚
 きたる顔色なく、阿嬭に失火の報知に驚き給ひしか、今
 いかん堅牢なる建築法を發明したり、内より火を失する
 こと、防ぎもならず、都下の人民年を追ふて増加するより、
 家屋の數も亦隨て増加なし、舊東京繪圖と云ひるものを看
 れば、都會の延長、方四里に過ぎざりしも、今なかく左
 にあらず、狭きも方七里に下らぬべし、阿嬭が看らるゝ如く
 此牛込區、十年前まで、空地あり、人家も疎らにてありし
 ろ、今、今、山の手と云ひ、皆紳士豪商の本宅ならざる、

なく現に此神樂坂の市塵を取拂ひ壯麗なる邸宅を以て填
 め尽くし是れより小日向へ掛けて巍々たる樓閣の屹立す
 ること、幾千百戸なるを知らず小日向より音羽邊の屹立す
 寂莫たる僻地なりと聞きつるが、今益す／＼繁昌の地と
 なり音羽なきに一戸だも軒の傾きし木造家屋なく粗造
 なりと云ふものさへ皆な塗屋ならざるなく山の手の市
 塵の四谷と音羽にて日用品の需要を給し他は皆な邸宅の
 地と變じたり此神樂坂邊の山の手にて最も高燥にして
 便利の地なりとし地價の漸次に騰貴して今一坪四十五
 圓乃至五十圓に昇りしを以ても都會の盛大を致したるを
 知らるべし昨年戸籍局にて調査したる報告に據れば外國
 人の東京に住居するもの三十一萬五千八百餘人の多數と

なれり然れば人々皆な火を戒めざるなけれども戸數の
 増加するに隨て火災も亦多く毎晝夜に掛けて少くも五
 六度の火災あらぬなし奴輩の既に火災に慣れしかば又
 もや火を失したりと云ふまでにて誰も驚くものあらざ
 るに云はれて靜江の又も時世の變遷に驚きたり
 然るにても靜江女の商店の近傍に失火ありと聞き心も自
 然から安からず汝の火災も驚くに足らずと云ひ張れど今
 報知の何人の來り告げしものならんか妾の安んじ能はね
 ば爰に呼び入れて失火の模様を尋ねよと云ひば從僕ハ呆
 れたる顔色にて暫し黙然としてありけるが強へて笑ひ
 を忍びて靜江女に向ひ從僕阿嬢に只今の急報を何と想
 ひしや靜江正しく人の來りて告げしと想ひり從僕此火

災報知の爲めに設けある傳話線にて、火災保險會社より報
 じ來りしものにて、人の來りしにあらすと云はれ、靜江「然
 らバ火災も坐して町名場所までも知り得らるゝ事となり
 しか、妾も警鐘の聲聞へぬハ訝かしと思ひしが、今ハ火災保
 險會社より戸々に報知し、警鐘も廢しとなりしにや、從僕「阿
 嬢にハ少しく考ひても看給ひよ、今の時世に火災あり迎馬
 鹿くしく半鐘などを打鳴らし、人の夜眠を妨る如きの愚
 を取るものあるべきや、靜江「左ハ云ひ今の火災ハ、商店の近
 傍なりと云ひしにあらすや、從僕「近火なれば萬一類焼にて
 もあらんかと憂ひ給ふにや、靜江「いかにも類焼が氣遣はし、
 從僕「類焼などハ舊世界の事にして、今ハ決して類焼の憂ひ
 なし、假令ハ隣家より火を失しても安心して居給ふべし、靜

江「然らんハ噴水器なども改良して巧みに火を防ぐこと
 となりしにや、從僕「噴水器とハ今博物館にて看受けたる舊
 世界の防火器の謂ひなるか、靜江「その防火器の事なるが、今
 ハこれを用ぬこと、となりしにや、從僕「阿嬢にハ前後の考
 ひもなさで、漫りに疑ひを抱き給ふにや、今猶噴水器など、
 云ひて、水をもて火を消す器械を用ぬんも、都會にハ一の井
 戸さへなきに、何れより水を引くべきや、阿嬢にハ能く物の
 道理を考ひて、言を發し給ひなバ、斯かる疑ひも起るまじ、靜
 江「開ハ眞實の事なるや、市中に井戸なくして、何を飲料とな
 すべきや、從僕「阿嬢ハ水道會社なるもの起り、都下住民の飲
 料を受負ふこと、となりしを知り給へぬや、靜江「飲料ハ會社
 の受負となりし上ハ、防火の事もその會社の兼業となりし

にや、從僕「否」な最前も云ひし如く、今の噴水器など云ひる迂
 遠にして、不便利なる防火器械の悉く皆な廢棄せられ、獨逸
 國の大物理學博士が發明に係る防火薬を用ゐることゝなり、
 如何なる猛烈の火なりとも、此薬を投じて煙を吹き出せば、
 忽ちにして消滅すること、宛がら火勢の熾んなる炭塊を水
 に投ずれば忽ち滅するが如く、絶へて類焼の憂ひなし、假令
 ひ萬一に類焼ありとするも、今の火災保險會社の保護を受
 けざる家屋の、唯一の戸もあらざれば、決して所有主の損失
 となくなし、然れば何れより火を失するも絶へて驚き狼
 狽するものなく、夜の隣家の火災にさへ、戸を閉ちて安眠す
 ると常なるに、類焼が氣遣ひし、火災の水にて消すべしなど
 云ひ給ふは、抑も是れ何言ぞやと一言を發する毎に無學

なる奴僕にさへ侮られ、靜江女の心にも如何なる威嚇を發
 せしや、看るもの聞くもの毎に呆然として、唯だ驚くより
 外はなかりけり

○第四回

電氣車を馳せて、市街に往來し
 歐亞園を開いて、山水を賞玩す

靜江女の從僕との話説に、思はず時間を費やしければ、又も
 や從僕を促がして、汝の疾く往へて人車なりとも倩ひ來れ、
 今より向嶋の別荘に赴くべしと云ひ、從僕は何事なるや
 解し能はぬ顔色にて、

從僕阿彌に、最前より人車を度々促がし給ひせも、如
 何なるものを云ひしにや、靜江人車との妾が居りし地方
 にて、野間を走る車なり、從僕「然らば老人の噂に五六十

備おで、都下にも行れしと聞くと、車に人を乗せて人が挽き
 寄るもの、事なるか、聞けぬ時世に、斯かる野蠻の器具
 其物しきものも行はれたるべきが、人智の進みし今日に
 ては、如何なる賤民なればとて、牛馬に等しき勞を取るも
 の、あるべきや、好しや有りとするも、萬物の靈たる人類
 畜して牛馬に代らしめ、怙然として恥ぢざるもの、女明
 の國に、なむと知り給ふべし、靜江、然らば馬車にて往く
 べきか、從僕「否、我主公には、時世に後れぬ活潑の氣性に
 て、疾くに馬車をバ廢されて、今、空船と電氣車にて往來
 し給ひば、阿嬢をバ電氣車にて送りまへらせん
 ど、牽き來る電氣車と云ひるものを看れば、形ちハ馬車に
 似たれども、甚だ輕便にして前に電氣力の運轉器械を設け、

の輕ふして且つ速かなるハ十世紀の末に行はれし、最も輕
 便なる自轉車の如きものなり、靜江、女ハ從僕の云ふが儘ま
 に此車に乗り、神樂坂の邸を出て、舊の坂下より、一直線に
 淺草に通ずる、新開の車道に向て馳せ出せり、此車道ハ舊と
 水道橋と云ひる河岸の山を鑿り崩し、平坦となしたる新道
 にて、人道とハ線路を異にせるものなり、舊世界にてハ最も
 幅廣き道路にて、百尺に逾るものハなかりしが、幾度か市
 街の改正を経て、車道ハ皆な百三十尺以上となり、人道の最
 も狭きものにて、六十尺に足らざるものなく、隨て市街の
 宅地を狭ばめたるより、都會の區域ハ漸く廣大となり、殊に
 溝渠の廻通盛んに行はれ、神田川と稱するものハ、纔かに荷
 舟の往來をなすに過ぎざる幅四十尺に充たざる細流なり

しが、墨田川の開鑿と共に此等の川幅をも鑿り擴げ、今ハ百尺に近き川幅となりて、貨物運搬の蒸氣船ハ自由に往來するとなり、墨田川ハ第三等の東京灣改築に際し、川幅を擴げたる凡ろ六百餘尺にして、舊と本所相生町の第三丁目まで川となり、大平洋を往來する飛脚船の繫留場を舊と吾妻橋と云ひる處に設るに至れり、此開鑿に關して費やしたる金額ハ八千萬圓餘に及びたりと、實に盛大なる土功にてありしかと、今ハ殆んど無用に屬するの有様となりはてしハ時世の變遷と云ひながら、亦惜むべきことなりと、從僕ハ語るを聞きし、靜江女ハ驚きながら何故に、此開鑿が無用となりしや、聞かまはしと問はれて、從僕ハ笑ひながら、從僕ハ阿嬢には知り給はぬ歎、今ハ歐洲にて乘雲船專ら行

はれ歐米の間に乘雲飛脚船の定期往復を開きしより、蒸氣船も殆んど無用の長物となり、今猶ハ蒸氣船の航海を業とするものハ、僅かに支那印度等の國人が、時世後れに營むに過ぎざれば、遠からずして海上に一の船舶をも看ざるに至るべし、靜江、時世ハ益す、開けたりとて、船舶を廢するに至るとハ、信じ難き事なり、話を中に電氣車ハ、乍ちに疾風を衝き去つて、その速かなると眞に電光の閃く如く、早くも横幅百尺もあるべき、大鉄橋の上を渡るかと想ふ時しも、支那の國旗を掲けたる、大汽船の浪を蹴立て、馳せ來るにぞ、從僕ハヒタと車を停る、何事にや、金屬の軋轆する響き聞へると程なく、大鉄橋の中央より二ツに割れて左右に開き、大汽船の過ぎ去るより

早く橋の亦た舊の如く合したり、此時遙かに隔りたる空上に
 いて、人聲沸くが如く喧しく、數千の人集りて立ち噪くかと
 想はれたるの、何事なるや、静江女に解し能はぬと訝かし
 き事よと想ふて橋を渡ると、車に左に折れて箭を射る如く
 走り去り、忽ち向島なる金岡氏の別荘の門前に到りける、御
 者へ静江女を扶けて車を下らしめ懐中時計を取出して長
 針を看ながら、今日の大宴會の爲めに電氣車の往復織るが
 如く爲めに衝突を恐れて徐歩したれば、意外に時間を費や
 したりと、獨語するを聞き静江女の車内にありて物躰をも
 看分け能はぬ程に迅速なるに、尙ほ遅かりしと、奇怪の言
 なりと、御者を顧みて試みに幾分時間を費やしたるやと問
 ひ、御者の常に五分間に到着するに、今日幾んど七分

間を費やしたりと苦ひたり、斯くまでに迅速なる車の發明
 あるからに、馬車の廢されたるも宜べなりと、静江女の心
 に驚きを絶へざりき、
 金岡氏が墨陀の別荘は、二十餘萬金を費やして築造し、建築
 の闊大美麗なるに云ふまでもなく、庭園の結構に至ては、深
 山幽谷の中に遊ぶの思ひあり、移し栽えたる珍草奇木の支
 那印度より輸入したるもの甚だ多く、鬱葱たる緑樹の枝に
 へ、野禽の哢喃たる聲を断たず、激湍たる噴水の池に、家鴨
 の游泳する影を涵たし、假山の上に疊みたる巖石へ、皆な遠
 隔の深山より移し來るとかや、金岡氏の日本に比びなき豪
 商にして、屢々歐米の諸邦に遊び、全世界にて山水の風
 景最も幽美なるもの、瑞西國の勝地に如くものなしとて、

此庭園ハ瑞西の勝景に倣ふて築造し、樹木の中に、瑞西の山中より移し來るものも少なからずと、今ハ外交益すべく親密となり、貿易彌よく盛んなるのみならず、乘雲船の流行ありしより、萬里の遠きも比隣ひりんの如く、歐洲の樹木を移し來て、東洋の庭園を賁るに至りしハ、亦愉快の事ならずや、第十九世紀の日本人にてありしなら、金岡氏の如く全世界の人を顧主として、無慮五億萬圓に近き大財産を起すこともなり難く、又歐洲の樹木を東洋に移すことも能はぬべし、是れ偏へに人智進歩の致す所にして、驚くに堪へたりと云ふべし、今日の統計に據れば、東京の人口ハ英の倫敦に比すれば三十餘萬の超過を致したり、今より數十年を出るあらば、全世界の富みを東洋に集ること、期して待つべしと想はれ

たり
 静江女ハ室に入りて従僕等に父君の事を問ひ、父君にハ支那の兵亂の爲め、上海南京等の支店にて巨額の損失を來たすの場合となり、東洋替爲會社の會議に出席して、未だに歸り來らずと、又、母君にハ今朝拂曉に大坂へ赴くと出て去りしが、果して大坂に赴きしや分明ならずと聞き、静江は思はず恨みの聲を發し、父君にハ至急の會議とあらば、出て行かれしも無理ならず、又、晩くも五六時頃ころにハ歸り給ふべし、唯だ恨みに思ふハ母君なり、妾が十餘年經りにハ相見あひまの嬉しさを、言葉にも盡くし能はねば、サアかし待ちわびてありつらんと、電氣車さへも遅しと思ふ程に急ぎ歸りしに、今日に限り急用かは知らねども、何ぞて家に待ち給はぬや、

好しや、餘儀なく出て行き給ふとも、東京内ならバ晩くも今に歸らるべきが、遠き大坂へ赴き給ふとの餘りとの情けなしと、頻りに線言云ひてありし時、一箇の從僕ハ忙しく室に入り來り、只今大坂より夫人の通信ありと云はれて静江女ハ言葉も忙しく

静江母君にハ全く大坂に趣き給ひしか通信ハ定めて電報なるべきが、如何なる文意なるか示されよ、僕否な電信の便にはあらで、傳話器にて通信あり、静江何と言ひ來りしや、僕當地にて止み難き急要事起り、岡山まで廻りたれば、歸りハ少し晩かるべしと静江何と云はれしぞ、岡山へ廻りしと儲かに申越したるか

と驚きたる顔色にて一層恨みの聲を放ち、母にハ兒を棄て

給ふの歎大坂へ趣きしと遠しと思ひしに、何とて岡山に廻り給ひしやと、云ひバ從僕等ハ顧みて異な言を云ひ給ふよと云はぬバかりの顔色にて、

僕阿嬢にハ何とて驚き給ふにや、大坂より岡山までハ里程も遠しと云ふにあらす、至急の要事とあらバ廻り給ふも理りならずや、静江母にハ妾の歸るを知りながら、大坂に趣くさへ情けなしと思ひ侍るに、岡山まで往きしとハ妾を思はぬが故なるべし、僕否な思ひ給はぬにあらす、阿嬢が待ち給はんと思ひバこそ、態々歸りハ晩からんと云ひ越されしにあらすや、静江否な、それハ辞柄とも云ふものなり如何に鐵道の往來ハ迅速なりとて、岡山まで趣きたらんにハ、早きも明後日ならでハ歸られまじ、僕阿嬢

に急行と云ひば、鐵道の便より外なしと思ひ給ふか、今
 の鐵道も迂遠なりとて、氣管車の發明あり、我邦にても已
 に東京と大坂の間に氣管車の往復を試んとて、専ら工事
 に着手中なるにあらずや、靜江「氣管車」といふ如何なる車
 といひなるか、電氣車といふ異なる車の事なるか、僕阿嬢に
 學校にて何を學び給ひしや、學問の日々に新たなる事柄
 を學ぶこそ肝要ならんに、徒らに既往に係る歴史のみ學
 び給ひしか、如何に地方の人智の時世に後るゝと云ひ、
 氣管車の發明をも知らぬと、時世に暗きも甚だし、靜江
 然らば頃日の新發明に係りしものか、僕「否な東洋にて
 また珍らしと思ひども、歐洲にては悉く鐵道を毀ち皆な
 此氣管車を用ゆることゝなり、此車の空氣の壓力にて押

送る機關なれば、無用の石炭などを焼くの手數もなく、又
 多數の機關手を要することもなく、且つ進行の迅速なる
 の、幾んど電氣の速力に亞ぐものとし、午前八時に土耳其
 の君士但丁府を發すれば、午後の二時四十分佛の巴黎
 府に達すと云ひり、斯ゝる迅速なる車さへ發明する時世
 なるに、彈丸黒子とも云ふべき、我日本國內を往來するに、
 豈に路の遠近を問ふの必要あるべきや、夫人の歸りの少
 しく晩かるべしと云ふまでにて、晩しとするも六時に
 必ず歸り給ふべし、
 と、説かれて、靜江女「訝しき限りなく、大坂より岡山まで、
 きたるに、一日間に往返し能ふべしと、抑も是れ如何なる
 道理にやと、未だ疑ひも解けやらず、尙も問はんとしける

時門前に電氣車の來りし響きあるは、父金岡富藏氏が今しも歸り來ると想はれたり

○第五回

北海道の北新府を開き支那國に共和政府を起す

此家の主人金岡氏と云ひるは、當時民間の大傑と仰がれ、才智容敏氣力豪邁にして學識に富み、殊に商法經濟の二學に秀て、市場の雄略を運らすに能く時機に投じ、その活潑なるは内外の商賈皆な推して市傑と稱し、畏れを抱かぬものはなし、氏が最も社會に効益を與へたるは、北海道に闊大なる紡績場を設け盛んに時好に適する絨類布帛を織り出し、専ら支那地方に輸出して大利を占め、又西京西陣の織物を改良して、佛國里昂の方法に倣はしめ、綾羅錦綉一として

内外人の好みに適せざるはなく、今東洋諸邦をして復た歐洲産を仰がざるに至らしめしのみならず、倒まに歐洲に向て輸出するに至りしは、實に至大の功なりと云ふべし、氏が此等の工場に費やしたる資金は、一億九千餘萬圓に昇りしかと、今全くその實功を奏し日々の潤益は十萬圓に下らずと云ひり、殊に印度共和國に德通して、綿布の大製造所を設けしめ、是迄英人の専有に屬したるもの、全く印度人の回復する所とならしめしは、最も大功なりと云ふべし、氏が政治上に執る所の主義は、純粹なる改進黨にして、今の院の議長に撰ばれ、改進黨中の最も錚々たる人物なり、氏の容貌を評すれば、骨格偉大にして、眼鏡鼻隆く、頬鬚甚だ濃かにして、頭髮は全く霜を戴き、年齢は六十有餘にして、一

目すれば威望儼然として、人をして自から敬服せしむ、殊に
議論滔滔たる雄辨家にして、今の保守党内閣が支那人の力
役者を禁止すべしとの議論に對し、切なる悲憤慷慨の雄
辨を振ひ劇しき攻撃を加へたるに、人皆な驚嘆せり、氏
支那を以て我日本帝國を保護する、一の堡壁と看做し、飽く
までも支那共和國を助けて獨立を全ふせしめよ、滿州帝國
に向ても交誼を厚ふし、遂に滿州帝國と結んで西比利亞
を獨立せしめて、一大共和國を創立せしめ、全く島國の羈絆
を脱せしめば、我北門の鎖鑰漸く安きを致すべし、此大政略
を實施するに、我人民をして滿洲より鞏固地方へも出稼
せしめ、彼の人民を鼓舞するの道を開くべき時に際し、却て
彼と交際を絶つが如き政略を施さんとするは、獨り日本帝

國の不得策たるのみならず、全東洋の爲めに害ありとの論
意にて攻撃し、遂に該議案を廢棄せしめたり、氏ハ斯ゝる大
雄略を抱ける人傑なれば、改進黨内閣を組織せざれば、我宿
志を達し難しと、頻りに黨員を鼓舞して、切かに謀る所あり
と云ひり、
金岡氏の車を下りて、玄關に上るや、靜江女ハ走り來て父を
迎ひ、父の手に縋がりて一言をも發せず、唯だ嬉れし涙に暮
れ居たるハ、父子の愛情の切なる處と云ひ又愛らしくぞ
看へたりけり、父ハそのまゝ、靜江を携ひて樓上なる便室に
到り互いに慈がなきを喜び、靜江の容貌を打ち看れば、
想ふに増りて成長し、今や蕾の綻び初めし風態にて、眞に窈
窕たる淑女となりしかば、父の愛情ハ甚だ切にして、地方學

事の景況などを問ひ頻りに懇めて居たりける、静江女に暫
 ばし黙然としてありけるが漸くに首を擡げ
 静江「今日しの兒の歸京を知りておはしたらん、父君に
 も母君にも何とて待ち居給はぬやと半ば云ひて又黙し
 たるの暗に恨みを訴ふるものと知られたり、父の歸京
 を知りたればこそ空船にて迎ひのものを遣はし、今日
 去り難き事故ありて、外出するをも傳へよと、吩咐たる
 に行違ひになりしかや、兒の果して我家の空船を看ざり
 しや、静江空船に遇ひたれども、迎ひの船と知らずし
 て、兒の汽車にて歸郷、去たり、阿爺が去り難き事故ありと
 の支那の兵亂に係りし事と聞きつるが、全く去る事故に
 てありしにや、父いかにも支那に係る事件なり、静江支那

帝國に叛逆人でも起りしにや、父「否、な兒に地方にあり
 しとて、新聞を讀みたらんに、支那帝國など、云ふの時
 世に暗きも甚だし、今、支那本部に帝國のあらざるをよ、
 静江「然らば世界に冠たる大帝國も、既に亡滅したるにや、
 定て歐洲人の爪牙にかゝりしとならんが、我日本帝國も
 諺に謂ゆる唇破れて齒寒しの感覺なかるべきや、父「否、な
 愛親覺羅氏の朝權を奪ひ、支那本部の社稷を回復したる
 の、東洋人の元氣振ひ興りし好結果にして、東洋は是れよ
 り益す、振ふべきも復た歐洲人の奴隸となるものあ
 らんや、兒の知らずや、支那本部に劉元成と云ひる蓋世の
 大豪傑起り、明朝の回復を名として兵を南京に擧るや、恰
 かも時機に投じて支那本部の壯士輩の、靡然として之に

應じ、兵の向ふ所軍食壺醬して迎ひざるのなく、忽ちにして北京城に迫れり、清朝の錯愕狼狽かに兵備を戒め、必死となりて防戦したれども、劉氏の兵勢は破竹の如く、奮戦激闘進むを知て退くを知らず、鮮血は流れて杵を漂へすに至り、清兵竟に支ふる能はずして、敗北し、清帝は纒かに殘兵を收めて滿洲に走り、支那本部を棄て、滿洲に據り、切かに朝鮮王に説へて同盟せしめ、以て劉氏に當らんとしたれども、策竟に成らずして和を講ずるに至りし、今を距ること三年前にあり、此兵亂の東洋未曾有の大兵亂なるに、兒の此事をも聞かざりしか、靜江支那に大亂ありしとの聞かざるにはあらねども、帝國の亡滅したりとの想はざりき、父「愛親覺羅氏の社稷の未だ亡滅したるに

あらず猶滿洲地方より遼東地方を併せ領して、全く支那本部をバ失ひたり、然るに遼東地方に一の猛烈なる共和党起りて、王党との軋轢日に益す甚だし、想ふに共和党全勝を収る能はざるも、愛親覺羅氏の羈絆を脱し一の獨立國を創立するの蓋し遠きにあらざるべし、其故の舊蒙古人の末孫等、切かに魯領西比利亞の人民と謀りて、共に獨立をなさんとし、西比利亞に魯國皇帝をして、遂に立憲政體を建立せしめたる程にまで苦惱せしめたる、虛無党中の最も猛烈過激なる一党派の口を極めて魯政府の壓制を罵り、魯政府の神聖なる人權を破壊する、社會の罪人を養生する一種の魔窟たり、我々の神に代りて此魔窟を攻撃せざるべからずと主張し、屢バ爆裂彈の兇器に

依頼して政府に抗抵を試みたり、此過激党と密かに氣脈を通ずるもの日耳曼にも起り、東西相應じて獨國にも妨害を加へんとするの色あるをもて、獨國政府も大いに怖れたり、獨國も大皇帝の崩じ給ひしより、聯邦の中に獨立を謀るもの多く、故宰相ビスマーク氏に養生せられしものも、今皆な此世を逝りしより、内亂屢々起りて、枕を高くするの日なく、今又過激なる共和党の起るに遇ひ、錯愕狼狽策の出る所を知らざるの有様なり、去れば魯帝の議を容れて過激党鎮壓の策略を施し、先づ魯國の過激党を壓伏すべしとて、爲めに兵力を籍るに至りしかば、過激党ハ西比利亞地方に遁れて住民を煽動し、又韃靼地方に遁れ來るものも少なからず、是れ韃靼人民が愛親覺羅

氏に叛き、爰に獨立を謀りし原因なり、靜江然らば支那本部ハ獨立して新帝國を起こせしにや、又否な支那本部の人民ハ、劉氏を推して帝位に登らしめんとしたれども、劉氏ハ元來支那の教育に養成せられし人物にあらず、十五六歳の頃より米國に游学して、専ら政治學を修め、二十三歳にして歐洲に趣き、諸邦の政績を視察して、遂に足を佛國に留め、巴黎の大學校に入りて、政治法律の兩學科を修め、大博士の免狀を得て益す、政治思想を強よめ、佛國人民の氣力活潑にして、天賦の自由を貴重するの風を慕ひ、支那に歸りて清朝に建議し、身ハ政體改革の委員に撰ばれて内閣に入り、幾千年來因襲したる支那の專制を廢し、立憲政體を創立せしめしかど、愛親覺羅氏の朝廷ハ動

もすれば支那本部の人士を忌み、滿洲人に政權を與へんとするの傾きあるより、議論合はずして朝を退ぎ野に下りては専ら人權の貴重を説き、遂に兵を擧げて清朝に抗したる人物なり、去れば再び支那本部に帝政を立るの策の得たるものにあらずとして、斷乎として人民の請ひを容れず、且つ云く支那人民の元氣を衰敗せしめし、第十九世紀の昔日に當り、飽くまで外邦の輕侮を受るに至りしもの、全く專制政治を墨守して、人權を屈縮せしめたるが故なり、余は專制の蔽最も大なるを知りながら、又豈に其蔽原を醸もすに忍びんや、且つ支那人民の商業に老鍊になるの、全世界に魁たるものにして、前途益すく富強を致さんには、人權を平等にして自由の生活をなさしめさ

るべからず余の不肖なれども支那本部をして更に一大佛國を創立せしめんとして、専ら共和論を主張し、遂に新大共和國を創立して、劉氏の大統領に撰舉せられたり、嗚呼支那よりして斯ゝる大豪傑を出し、米國の故英雄華盛頓氏に愧ぢざるの偉功を奏せんとの夢にだも想はざりしが、世の氣運の致す所の實に測るべからずして、東洋の天地の全一變したり、
 と、説くを聞きて、靜江女、斯くまでに時世の變遷あるを知らざりし、吾身ながらも愚かなりきと心竊かに愧ぢらひけるが、去るにても父が支那共和党に關係ありとの訃かしき事なりと想ひ
 靜江、今支那に兵亂ありとの共和政府に又兵亂を起せし

ものありしにや、復たその兵亂の如何なれば父君に關係を及すにや、父「共和政府」の立て動かざるも、帝政黨の殘党が内亂を起し、南京を陥れんと謀りたり、余が總轄する東洋爲換會社の支那豪商等の依託を受け、一億萬兩の資本を分つて南京に支店を出したるに、賊兵の市街豪家の財産を掠めんとし、我爲換會社の支店も殆んど彼が爲めに強奪せられたり、靜江「その一大事變にてありたりき、父君にも巨額の損害に遭ひ給ひしか、父「否、強奪はされたれど、初め共和政府と契約を結んで出店したるものなれば、萬一強盜又ハ叛賊の爲めに損害を蒙るときは、政府より代つて辨償する契約なり、此頃共和政府の軍用欠乏して紙幣を發行したれども、通用意の如くならずして猶不足

せり、依て上海の海關税を抵當として、我爲換會社より一億五千萬兩を借入れ、利子の通例年四分弱まで以下落したれども、今度の焦眉の急に迫るをもて、四分半までの利子を附すべしとの照會電報、今曉會社に達したり、爲めに役員の時會議を開き、會社の假令十分の利益なきも、此際共和政府を助るの、後來東洋の得策なりとの説多數にして、遂に貸渡すべきに決し、此等の契約取結びの爲め、會社の役員ハ急行乘雲船にて共和政府に向け、午後三時二十五分に出發したれば、只今頃共和政府に到着して、その談判最中ならん、靜江「その金圓ハ矢張り飛脚船にて積送り給ふにや、父「瀛船などの迂遠なる方便を恃まば、なか急場の用を辨じ難たし、契約締結の通報今夕まで

に達しなば、上海支店より金圓を送ることに決したり、余が
 會社を出る時に達したる電報に據れば、叛賊の氣焰な
 かに熾なりと云ひ、共和政府もこれが爲めに一時
 艱苦を蒙るべきも、余が考ひて、雨降つて地固まり、共
 和政府の益す、確立して動かざるに至るべし、静江兵
 亂の模様分明に聞き給ひしか、父「日々明細なる報知あ
 り、東洋電信新聞社の最も探訪を密にして、日々の紙上に
 登録し、且つ速寫法に熟練なる寫眞師を携ひ去り、乘雲船
 にて兩軍戰鬥の實況を寫したるもの數枚あり
 と云ひて、徐ろに身を起し、書架より新聞紙を取り出して
 示すを看れば、電信新聞社の附録にして、唯だ紙面に班らの
 黒點あるのみ、一字も文字らしきものあらざれば、静江女

狐狸に誑かされしもの、如く呆然として居たりけり

〇第六回

電報新聞符號紙を發し
 香港空船氷果子を送る

金岡氏の静江女が新聞紙を手取るのみ、何言をも發せざ
 る、讀み得ざるものかと思ひ、自からも呆れたる顔色にて
 父「兒に未だ電報符號を知らざるにや、静江電報符號と
 何事を云ひ給ふにや、父「兒に今より事業を營む身を
 以て、電報符號をも知らざるは、無學文盲も同然なり、電
 報新聞社にて、急報を羅馬字に記すの時、猶讀者に
 通報の後れんとを恐れ、電報復寫法にてそのまゝ一時に
 數萬枚を復寫し之を讀者に配達するに急行電氣車を
 用ゐることとなれり、電報社の支那擾亂の爲め、電氣車の數

を増したると九十餘輛に及び、總數五百輛にて晝夜を分
 ず、直ちに急報を配達すれども、猶ほ配達者の遅刻を憂ふ
 る程なりと、去れば今ハ幼童ども電報符號を知らざる者
 なし、此電報ハ兵亂の起りし、より今日までの急報を一級
 にしたるものなり
 と、父が一々讀み下すを聴けば
 支那共和政府ハ本年七月二十八日、第二回の建國紀念會
 を南京に行ひ、盛んなる式典を擧げ、大統領劉元成氏ハ、公
 園内に設けたる演說壇に上り、共和政府が前途益々富強
 を謀るべき政略と、我支那國ハ後來決して立君國たらし
 むべからざる意見とを演說されたり、劉氏は將に此演說
 を終らんとし、公衆皆々共和政府の滿歲を祝するの聲、公

園内に溢るゝに際し、何者とも知れず公衆の中より、劉氏
 を目掛けて爆烈彈を投じたり、その彈丸ハ幸いに劉氏に
 的中せずして、傍らなる内務衙門長官朴曹氏の面前にて
 破裂し、朴氏ハ爲めに傷いて斃れたり、
 警察官ハその賊を追跟し、公園外にて捕縛したり、此賊ハ
 共和政府下の人民の如く、頭髮を蓄して散髪となり、窄袖
 細袴を着け居たれど、懷中に帝政回復の檄文を挟み、全
 く滿州人なるを發見し、直ちに糺彈を遂げたるに、二萬
 餘の党員ありて、先づ大統領劉氏を斃し、後ち兵を擧るの
 密謀已に成れるとを供出したリ
 共和政府ハ直ちに五千の歩兵と、二千の騎兵とを派遣し
 て、南京府内の警備をなさんとするに際し、公園に集りた

起る人民の中より、五人十人忽ち爆裂彈を投じて擾亂を提
 起せしより、人民の動搖甚しく、山を崩すが如く四方に
 散亂し、既にして何くよりか起りけん、百人二百人の賊兵
 銃を負ふて現はれ來り、忽ちにして一萬餘の兵となり、四
 方より發砲して官兵を攻撃し、殊に官兵を惱したるは、佛
 國發明の野戰乘雲船に乗りて、空中より廟堂を狙撃した
 るにてありき、共和党の憤然激昂して賊を逆ひ撃ち、二十
 八日の午後七時より、翌二十九日の午前八時まで劇しき
 戦ひをなし、兩軍の死傷未だ詳かならざれども、無慮五千
 人に下らざるべし、
 王政回復党の多くは強盜等の兇賊を煽動し、利を啗ばせ
 て同盟せしめたるものと看へ、南京府内の人民は、賊兵の



フ迎ヲル帰テ = 船空ノ母



女少 = 莊別坵墨ノ開新

爲めに財貨を奪はれたるもの甚だ多し、共和党の死を致
 して奮戦し、七月二十九日の午後一時になんくとする
 頃、漸く賊兵を南京府外に逐ひ出したり、賊兵の南京府を
 距る三里程許の處に堅固なる堡壁を築き、持長の策に汲
 々たる摸樣なり、今朝の勢いにては賊兵なかくは慄悍
 なり
 静江女の此數報を聞き、大いに恐怖の色ありけるが、爰に又
 驚くべき一報を聞き得たり
 七月三十一日午前第二時頃、賊兵の風雨に乗じ、密かに迂
 回して官兵の背後を襲ひ、官兵不意を撃たれて死傷甚た
 多し、翌八月一日午後第六時に及んで再び賊兵の攻撃を
 受けたれども、防戦機を誤らずして竟に賊兵を追撃し、官

爲めに財貨を奪はれたるもの甚だ多し、共和党の死を致
 して奮戦し、七月二十九日の午後一時になんくとする
 頃、漸く賊兵を南京府外に逐ひ出したり、賊兵は南京府を
 距る三里程許の處に堅固なる堡壁を築き、持長の策に汲
 々たる模様なり、今朝の勢いにては賊兵なかくに慄慄
 なり
 静江女は此數報を聞き、大いに恐怖の色ありけるが、爰に又
 驚くべき一報を聞き得たり
 七月三十一日午前第二時頃、賊兵は風雨に乗じ、密かに迂
 回して官兵の背後を襲ひ、官兵不意を撃たれて死傷甚た
 多し、翌八月一日午後第六時に及んで再び賊兵の攻撃を
 受けられたるも、防戦機を誤らずして竟に賊兵を追撃し、官

軍の騎兵隊の敵の堡壁に乘入り、蹂躙接戦三千の騎兵の
 二千を失ふまで劇戦し、漸く堡壁を陥れたり、
 八月三日共和党の大擧して、咄嗟賊兵を進撃し、賊の勇將
 李伯循を倒し、賊兵稍や辟易の色を現はしたり、
 帝政回復党の窃かに朝鮮の王政党に謀して應援を乞は
 たりとの風説あり、之れが爲めにや朝鮮の共和党の激烈
 なる檄文を傳へて党與を嘯集し、支那共和党に應ずるの
 色ありと、此説稍や信に近かるべし、何となれば朝鮮國王
 の、遽かに下議院に向て臨時國會を開く旨の勅令を下し
 たりと、只今京城發しの電報到達したり
 と、讀み終りたる時、一箇の支配人らしきもの室に入り來り、
 金岡氏に向て告るを聞けば、只今爲換會社より傳話器にて

此急報ありと、匆々に書取りたるものを出すを看れば、
 帝政回復党の一分隊の、上海を襲ふの勢いあり、共和政府
 の早く防禦の兵を繰り出したれど、内外の人民大いに動
 搖せり、我支店の日本領事館に入て保護を乞ふべきや、直
 く回答あれとの電報達したり、如何に回答なすべきや
 金岡氏はこの急報を讀んで眉を擧め、思案の態にてありし
 時、又もや傳話器にて急報の聲あり
 日本政府の只今乘雲船會社に特命を下だして、急行乘雲
 船の悉皆雇いあげられたり、電報社別配達の急報を看れ
 ば、政府の今夕三大隊の兵員を支那に向けて派遣するの
 命を下したりと聞く云々とあり、想ふに乗雲船にて出發
 せしめ、我居留人民を保護せらるゝものならんか、

此報を聞きて金岡氏の安堵したる顔色にて、上海支店への臨機應變の處置あるべき旨を回答せしめ、再び支那の話を繼がんとする時、金岡夫人の歸り來ると聞き、静江女の母君にの意がなく歸り給ひしか、懐かしかりきと走りて樓階を下らんとすれば、父の忙はしく引き止め、母に今歸りしに、兒は何くに往くやと問はれて、静江女の立關まで出迎ひまへらさんと、又も走り出さんとす、父の言葉も忙しく、母に乘雲船にて往かれしに、立關にて迎ひんと何事ぞ、早く五階に昇れよと云はれて、躊躇する時しも、夫人のはや船を五階の鉄欄に繋ぎて、三階なる長人の便室に入り來れり、静江女の母を看るより袖に縋り着き、又もや恨みを含める聲をいだし

静江「母君に何とて兒を待ち受け給はぬや、いかに急要の事あれバとて、明日に繰り延べもせらるべきに、母君に無情にも速く遇はんとし思ひ給はぬや、母阿兒の歸京と聞くから速く愛らしき顔を看バやと思ふ心の飛び立つ程にてありしかど、明日を待たれぬ急用にて、是非なく大坂に赴けり、殊に私用にあらすして、公けの事なれば、社會に對しても辭し難たし日々に慕ひし阿兒の歸京さへ、待ち受ること能ぬ時世となりしは、人情の薄らきたりと云ふにあらす、第一は女子の權利漸く振ひ、第二に人皆な社會に盡すの義務を知れるが故なり、去れば今日母の不在なりしに、阿兒の身に取れても喜ぶべき事にして、恨むべきにあらぬぞかし、静江去りながら公けの

事にも、軽い重いの差いはあるべきに母君に如何なる
 事に係り給ひしか
 と、問はれて母の笑ひを含み、大坂の議員撰擧區に於て、補欠
 會を開くの通知あり、今回の補欠會に、若しも改進黨の中よ
 り當撰したらん、に、保守黨の失敗を取るの恐れあり、此母
 も保守黨員にて、屈指の位置に置かるゝの身なりせば、云
 は、我党派の盛衰に係る大事なり、黙して傍觀するの場合
 にあらず、去れば往て力の及ぶ限り、幹旋し、且つ一場の演
 説を試みたるに、幸いにして我党の中より撰擧せられたり、
 又大坂に到りて聞けば、近々岡山の撰擧區にも、三名の補欠
 會を開くよしなるに、岡山の婦人に、改進黨員たるもの最
 も多く、此等の婦人の今度の補欠會に、改進黨の勝利を謀り

居るとのとなり、岡山縣下の郡長に、我保守黨の婦人より
 撰任されしもの、両三名もあるを幸いに大坂へ趣きたる序
 をもて、此等の商議の爲めに岡山へ廻りしゆへ、歸京まで
 は、凡そ二時五十分間を費やしたりと語るを聞き、静江女
 心窃かに疑ひける、父に、改進黨の副首領なりと聞きつ
 るに、母が保守黨の爲めに奔走するの心得難たしと、此疑ひ
 の包むべきにあらずと想ひ、母に向ひて、問はんとすれば、父
 の早くも静江の心を付りけん、口々に云はねど、目と手を以
 て、その質問を押し止るの様子なれば、静江の如何なる理由
 か解らねども、問ふて、悪し、その意ならんと、その儘まに
 して止みたりき
 金岡夫人の愛女の歸京を喜び、爲めに祝宴を設けんとて、室

を出て去るを見て金岡氏の密かに静江に語りける、見
へ未だ知るまじきが今の保守党内閣の怯弱なる笑ふに堪
へたる有様にて正しく堂々たる党派の戦ひに到底敵し難
たしと悟り、切かに婦女子の力を藉りて、改進黨の撰擧を妨
碍せんと謀り、女權振興の時の至るを名として、婦人の郡
長を各府縣下に置かしめたり、故に兒が母も亦保守党内閣
の奴隸たるを覺らず、頻りに奔走するの氣の毒なりと云ふ
べし、余の夫人と家に在りては夫妻なれども、外にありては
政敵たりと云はんとする時再び夫人の入り来るを見て、遠
かに話しを止めしかど、静江も心に曉りけん、唯だ首肯のみ
にして、復た党派の事の間はざりき、夫人の坐に就きて静江
を近づけ、種々新らしき談話をなして慰めながら

母「今日ハ愛女も歸京すると云ひ、殊に炎暑も堪へ難き程
なれば、何をか消暑の助けともなるべき、珍味もかなと想
ひしに、幸い近頃香港にて英人の發明したる、一種の氷果
子ありと聞き、今朝注文して置きたれば、最早送る來るべ
し、此菓子ハ舊世界にて珍重されたるアイスクリームな
きの製法と違ひ、鶏卵と牛乳とを砂糖水に和したるもの
を圓形となし、其中に美味なる果實の酸味を和せし餡製
のものを入れ、堅氷となるまで凍らしたるものなれば、
二三日間を経るも融るの憂ひなしと、實に炎暑の時ハ
何よりの珍味ならん、静江母君にハ今朝香港へ注文した
りと云ふに、今日の中に送り來らんとハ、前後應せぬ話し
に侍らずや、母「愛女にハ何と云ひ給ふや、香港まで一日間

に往復は出来ぬと思ひしか、今ハ米國の乘雲飛脚船會社
 が神戸長崎を経て香港への往復を開き、目今試験中のこ
 となれど、一日に二度の往復あるを知らざるか
 と云はれて、静江ハエーとばかりに驚きたり、此時金岡氏ハ
 夫人に向ひ、晚餐の用意ハ已に整へたるやと問ひば、夫人ハ
 時刻早しと思ひ、未だ命じハせざりしが、最早晚餐の時刻と
 なりしやと、時計を看ながらに語を繼ぎて、已に七時に二十
 分を過ぎたり、速かに命ずべしとて、傍らなる器械に向ひ、銅
 線の端を引きしのみにて坐に復し、庖奴を呼びて命ずるの
 様子もなし、静江ハ又も心に疑ひけるハ、妾が爲めに祝宴を
 開くと云ひながら未だ割烹を命じもせず、好しや命えたり
 とするも、今より調理せしめなば、夜半に至るも整ふまじ、母

ハ如何なる心にてありつるか、扱々訝しき事なりと、去りな
 がら問ふも憚りありと思ひ、母が爲すまゝに任せ居りし
 に、凡そ十分時も過ぎたらんと想ふ頃、一箇の蒼頭ハ入り來
 り、夕餐の調度已に整へたり、イザ食堂へ入らせ給ひと、云は
 れて静江ハ驚き呆れ、言葉の出す處を知らざりけり

○第七回

調食會社新割烹を争ひ
 傳音器械演劇詞を傳ふ

兩三年來歐洲の新法に倣ひ、我東京にも調食會社なるもの
 起り、日に三度の食物ハ、皆な此會社に托して送らしむると
 となり、之が爲め府下にて著しき影響を蒙りたる商店多し、
 開ハ薪炭賣買を業とするものなり、左なきだに電氣の効用
 益す盛んととなり、隨て蒸氣機關を使用したる諸工場も、大概

ハ電氣を使用すること、なり、遠からずして汽船をも全く
廢するに至るの有様なれば、石炭の價日を追ふて低落した
り、諸工場の如きハ、電氣と石炭を比較すれば、電氣の方甚だ
輕便にして、且つ費用も甚だ廉なれば、石炭を燒いて、蒸氣機
關を運轉するの下策を取らざるも、亦宜べなりとこそ云ふ
べきなり、去れば、戸々皆な高價の薪炭を廢して、割烹用にも
廉價の石炭を用ること、なり、今又調食會社大に行われ、
その大いなるもの已に十餘社に及び、隨て食味と價額とに
就て競争を始め、甲會社にて一食一圓と定むれば、乙會社に
ては七十五錢とし、丙會社の又々價を減じ、五十錢にて賣出
すと云ふ勢いなれば、互ひに滋味と廉價とを以て、花主の愛
顧を取らんとし、爲めに各自の家にて調理するもの絶へて

なく、皆な此會社に委託して送らしめ、爲めに薪炭の賣買日
を追ふて減少するに至りしハ、亦是れ時世變遷の一徴と云
ふべし、此調食會社が食品を配達するにハ、皆な電氣車を用
ぬ且つ割烹の巧みなると味の美なるに至てハ、十九世
紀の人々等が、想像も及ばぬ程に進歩して、殊に肉類を軟か
にする法、炮煮を速かにする法などハ、皆な學術的研究よ
り得たる好結果なれば、食ふとして口に適せざるものハな
く、且つ衛生上にも大いに効益あること、なれり、此會社と
契約を結び居るものハ、皆な傳話線に類するものを、會社と
自家との間に架し、その線ハ食品に因りて區別をなし、又一
の時刻を報する線ありて、何々の食品を何時何分に送るべ
しと、鉄線を引へて報すれば、坐して何百人の食品なりとも、

必ずその時刻に送り來るの法なり、最も此時刻を誤らざるを、會社の一名譽とするをもて、何時にても、需要者の指支を來たすとなし、金岡氏も此會社の最も好評あるものと契約しあるをもて、今しも直ちに送り來りしなり、静江女ハ斯る契約あるべしとも想はねば、咄嗟の間に夕餐の調理整へたりと聞き、覺へず驚きたるも亦宜べなりき

金岡夫人ハ静江女を促かして食堂に入り去れば、山海の珍味ハ己に食卓に上りて嗜好を待つが如し、金岡氏は夫人と相對して食匙を把り、近來調食會社ハ更に百六十萬圓の新株を募り、英國より新發明に係る器械數種を買入れたれば、調理も亦一層巧みとなり、鹽梅も亦旨しなど、評しツ、葡葡の美酒を傾けながら、頻りに談話するを聞けば、或る老人

の説を聞くに、今を距る四十年前までハ、日本酒と云ひバ唯だアルコールの強きもの、みを良酒とし、麥酒などさへ外國より輸入するもの多く、我邦に善良なる米穀の産出ありながら、歐洲麥酒の如きものすら、猶釀造が出来ざりしこのことなるが、今日より看れば笑ふに堪へたりと云はんよりハ、寧ろ信じ難たしと想ふ程なり、當時學術の不進歩と智識の未開との、話説の外なりとも云ふべし、攝州灘伊丹にて近年釀造する麥酒製の酒に至てハ、全世界に比類なしと云ふべし、穀類の中にて最も良品なる米穀を以て釀造し、且つ土中に埋め置くものも、三年を経ざるものハ發賣せざるの組合規則となりしより、一層その聲價を得て、今ハ海外に輸出するもの、一年五千二百餘萬噸に及びたりと聞けり、實に

盛んなりと云ふべし、曾て肉食を重もにせざる時ハ、全國の米穀十が八九ハ食料となり、海外に輸出するもの僅たる少數なりしと、古るき統計表中の説明にて看たるとありしが、今ハ全國肉食の行はれざる處なく、隨て米穀に餘利を生じたと、想ふに巨額なるべきも、絶へて米穀の輸出あるを問かざるハ、麥ハ皆な自國用の麵包となり、米ハ皆な酒釀に消費するものと思はれたり、曾て明治十九年より二十年の間に、當時の專制内閣が公布したる歳入豫算表を看るに、酒釀税額ハ驚くべき程の少額にて、僅に一千萬圓にも充たざりし、今ハ麥酒製の酒より、各地にて盛んに釀造する葡萄酒又ハシャンパン酒セリ酒等數種の釀造を合算すれば、幾んど第十九世紀の總國税を合算したるよりも、猶幾分の超過

あるべし、去れば本年の國會にて酒造税を減じ、益する奨励法を行ふべしとの建議出て、遂に多數の賛成を得て可決されたるも、亦誠に以あると云ふべし、本年北海道の釀酒場にて、百萬石餘を増醸するの預算なりと云ひ、貿易場に幾分か利益を増加すべし、願くハ今一步を進めて、價の幾分を減ずるに至らば、歐洲の酒類をして、復た東洋人の口に上らしめざるに至るべしなご、談話の際に乘雲船會社より、今朝注文したる香港製の氷菓子を送り來れり、その製造の巧みなること、筥館五稜廓にて販賣する天造氷の如く、甚た硬きものなれども、口に含めば容易に噛み碎かれ、殊に清涼たる中に云ふべからざる美味を含み、僅かに一箇を喫すれば、煌々たる炎熱を忘るゝの思ひありて、その爽快想ふべし、

静江女の夢想も及ばざる話説を聴くのみならず、坐して海
 外の珍味さへ嘗め、如何に時世の進歩したりとて、斯くまで
 に何事も便利となりたるは、人力の爲す所との思はれずと、
 唯た驚くのみにして何言も云ひ出さず、默然として居たり
 けり
 宴稍や酣のなるに及んで、金岡氏の夫人に向ひ、當今築地の
 劇場にて、何の狂言を演ずるや、英國にて一時名聲の高か
 りし、エム、シロットと云ひる女俳優も出勤するとのとな
 り、余の商業の繁忙にて寸暇もなく、未だ一覽もせさりしが、
 幸ひ静江に舞場の臺詞なりとも聞かせよと云ひ、夫人の
 妾も左こそと思ひ居りしとて、身を起して、隣室に到り、何
 事をなせしや忽ちにして入り來り、静江よ新劇場の有様を

看よとて隣室に誘ひたり、金岡氏も共に往て椅子に憑るよ
 り早く、何くよりか送りけん、瀏亮として音楽の聲を送り、音
 調稍や絶へなんとする時、三箇の俳優の聲として舞臺に上
 り、今を距ると七十餘年前に、勤王の壯士が當時の幕府を倒
 さんとて、艱苦を嘗る有様を、面白く仕組みたるものと思は
 れ俳優の姿こそ看へねども、真に目に観るが如きの感じを
 起こさしめたり、静江の餘りとの不思議の事よと四方を顧
 れども、一箇の伶人居らざるのみか、俳優の影だに看へざる
 に、臺詞の手に取るが如く分明に聞へたり、静江の一齣を閲
 りたるかと想はれ、唯た音楽の聲のみ聞る時しも、心の不審
 晴れやらねば母に向ひ、
 静江「妾の實に夢に夢見し心地あり、母「僅か二日にも足ら

ざる旅行なれども、汽車にて歸へりしと云ひば、精神の疲
勞したるにや、靜江「否、な去る事には侍らず、今聞きし音楽
と云ひ臺詞と云ひ、正しく劇場に居りて見もし聞きもす
るの感じあるに、この劇場の一里餘を隔る築地なりと云
ひるは、抑も是れ如何なる道理にて、斯る不思議の働き
をなさしむるや、妾の夢とより外に想はれず、母「愛女に
是しきの事さへ不思議と想ふにや、此の傳話器に基きて
新たに發明したる一種の傳音器の働きにて、舞場にて奏
する音楽より俳優の言語まで、この儘に送り來れるな
り、當今の時世にては男女の別なく、何人にては事業を執
らぬものもなく、演劇見物の暇とては、なか／＼にあらざ
れば、大概に此影芝居と云ひるものにて、時の狂言をも知

るととなれり、又昔しの宴會の席へ樂人を傭へ來て、來客
の面前にて樂を奏せし習慣なりと聞きつるが、今の斯る
る手数を費やすものはなく、奏樂に、音樂會社と云ひる
ものあり、常に許多の樂人を食ひ置き、何れの樂なりとも
願主の望みに應じ、傳音器の働きにて其家に送り來ると
となれり、靜江「想ひきや真に斯る器械の發明ありしに
や、母「愛女に此傳音器さへ奇なりとして驚けども、歐洲に
ては觀聞器とて、喻へば坐して遠隔の演劇を観んとすれ
ば、俳優其者の姿の顯然と鏡面に寫り、眞の觀劇をなすに
異ならぬ、不思議の器械さへ發明したり、最早遠からずし
て東洋にも行はるゝこと、ならんが、何事も歐洲人に先
鞭を着けらるゝ、東洋の人智未だに發達せざるが故な

らん、此身の常にこれを嘆息せり
と云はれて静江女の益すゝ驚きを重ねたり、既にして劇
場も閉ぢたりと見ひ、打出しの鼓聲さへ聞へければ金岡氏
の夜も早や十二時に近かゝるべし、静江も定めし疲勞せし
ならん最早寢に就くころ好かるべしと、静江の母に誘はれ、
一の寢室に到れば、母の何くれとなく注意の言葉を添ひ、我
寢室へと出て去りけり

○第八回

偶ま失火報を聞て奇術に感じ
誤て警報線を引て全家を驚かす

四五日來の炎熱の焔くが如く、夜に入りても猶ほ汽罐の上
にて蒸さるゝ如し、今の電氣の働きて發明したる、起風器
と云ひるものを一室毎に天井へ懸け、宛かも數十の團扇を

一時に揺かすが如く斷へず風を起こして暑勢を驅れとも、
猶堪へ難き思ひあり、殊に静江の種々の思想胸に鍾りて、寢
に就けども眠る能はず、今宵は夜熱さへ酷しく、室内の空氣
も沸騰するの思ひあれ、新鮮なる空氣を流通せしめんと
て、身を起こして、窓を開き、又も驚ろきたる一事あり、開は他
にあらで都會の宛がら白晝の如く目に觸るゝもの皆な歴
然として分明に看へたる一事なり、今宵の月夜にて斯く明
かなるかと思ひば、左にあらす、斯く皎々たる光りを發する
もの、是れを幾百千となく都會に建て列ねし、電氣燈の光
りなり、静江女、此有様を看て驚き、又東方の窓を開きて看
れば、猶ほ白晝の如く處々に電氣燈を掲げしのみならず、又
もや驚きたるゝ須崎村邊の景況、全く一變したる一事なり、

静江が幼少の頃都會にありし時、墨陀と云ひバ高さ一丈
 許りにして、幅バ二十尺にも足らざる堤防を築き、右の左右
 に櫻樹を栽列ねて、堤下に人家あれども疎らにして、多
 くハ田畠のみなりしに、墨田川の開鑿ありしより、更に高大
 なる堤防を築き、堤の全躰ハ堅牢なる人造石をもて築き、如
 何なる洪水にても破壊せらるゝの憂ひなく、又堤上にハ櫻
 樹と灌木とを栽列らへ、塵さへあらぬまでに洒掃も行届
 き、一層風景を添ひたるのみか、須崎村より小梅村邊にハ、大
 厦高樓峨々と蒼空に聳えて、復た一の田畠をも看す、此邸宅
 は唯たに別荘のみぞハ想はれず、蓋し市街の繁華なる處ハ、
 皆な商店用の家屋を以て、填め此墨陀に本宅を設けたるも
 の、年々に増加したるが故なるべし、想ふに本所深川なども、

今は彈丸の空地もなく、市塵と邸宅をもて填め盡くせしこ
 となるべし、山の手の變遷と云ひ、此邊の景況と云ひ、實に都
 會の繁昌は推して知るべしと、獨り感嘆なしッ、も窓を鎖
 ざして再び眠りに就かんとする時、寢臺の下に人聲を發す
 るものあり、何事ならんかと驚きて耳を敲つれば、火災保險
 會社より、傳話器にて送り來れる急報なり
 只今淺草駒形町より火を失したり
 静江ハ此急報を聞きて、火災の有様を眺めんと、再び窓を開
 きて、淺草の天を望めバ、恰かも今屋上に燃に抜けたる時に
 して、火勢ハ焰々として天を焦がし、風さへ強ふして忽ち四
 方に延燒せんかと、眺る間もなく怪むべし、指しもに猛烈な
 る火焰なれど、宛かも燈火を吹き消す如く、忽ちに消滅して

一 点の殘光さへなきは、是れを消火薬を投じて打消したるものと思はれたり、静江に此有様を見て大いに驚き、茫然として眺る折りしも、百千の半鐘を一時に打鳴らす如く、鐘々然として聞ゆる聲は、又もや失火の警鐘ならんと想ひ、此に左にあらずして、處々の屋上に備へたる大時計の、午前二時を報ずるの響きにてありき、静江の夜の痛く更けたるに驚き、忙しく窓を閉ぢて寢床に上り、勉めて眠りに就かんとすれども、電報社よりの急報の櫛比の如く、暫くも絶る時なく、一報を送る毎に器械の鈴の聲、鏗々然たるさへ喧しく、いかにしても眠り成らざれば、聞くともなしに急報の耳に上り、續かに記臆せしものゝみにても

一支那帝政党の一隊は、退へて北京城を衝き、死を致して回

復を謀りしかど、共和政府の鎮臺兵の爲めに打破られ死傷を棄て、敗走したり

一 上海の賊亂を免れたり、今年後七時五十分叛賊の間者數名を偵捕して、賊の軍略發覺し、爲めに氣焰衰へたり

一 英國改進黨内閣は、一昨夜の國會にて意外の失敗を取り、直ちに一同辞表を呈したり、委細の後より

一 土耳其と比耳西亞の國境争ひに遂に破裂し、比耳西亞の印度共和國に應援を依頼したり、戦塵を揚るも數日の間にあるべし、

一 獨國の社會党は三千の兇徒を囂集し、已に匈加利を占領し、匈利王の澳國に遁れたり、此不意の襲撃は最も殘酷を極め、市民の斃れたるもの山を作し、その慘状は古代の

野蠻戰場に異ならず、此等の急報に静江の眠りを妨げられ、耳を掩ふて眠らんとすれども、種々の想像の驚くべき有様を眼界に描き出し、轉輒反側たる折りしもあれ、又もや一の驚くべき急報を傳へたり、

一 今年後七時に兵員を載せ、支那上海へ向け出發したる乗雲船の一艘の、揚子江の空上にて機關を損じ、百名許の兵卒の水面に墮ちたれども、一人も負傷なし

と、静江の聞く毎に驚く事ばかりにて、到底安眠のなり難たし、寧ろ傳話器の働きを止るに如かずと、一の器械に向ひて鉄線を取り、器械との關係を断たしめて、總かに眠りに就くや否な、門前に來りて頻りに扉を叩き、又の鈴を振り鳴らし

て叫ぶものあり、静江の又もや變事の起りしならんと、夢の倏ち破られて、忙しく身を起こし、窓を開きて門前をきつと望めば、凡そ十數名の巡查の邸宅の四方を圍み、右よ左よと駈け廻る有様なり、此時静江の驚きの當ならず、此は父母の一身の上に關する事歟、又の僕隸の中に罪を犯せしものありて、警吏の犯人を拘引せんが爲め、故ら深夜に來りしかと、身も世もあられぬ心地して、寢床に居り難く、走りて室を出てんとする時、父の寐室を出て來りて、僕隸等呼び起こし、賊の何れより忍び入りし歟、誰が告知したるにや、警吏の已に門前に來ると叫べども、僕隸の唯た驚くのみにして、告知したるものなしと答ふるにぞ、金岡氏の甚た訝かしと想ひ、静江に向ひて若しや阿見の室に賊の入りしに驚き、警察署

に急報を傳へしものと問ひども知らずと答ふるのみ、誰が告知したるや定かならず、又賊の忍び入りし様子もなし、此時警吏ハ已に門内に入り來り、只今賊入りしとの急報に依りて出張せり、賊ハ何れへ脱遁したるにや、家の周圍にハ已に發電線を繞れしたれば、假令ひ遁れんとするも電氣に打たれ一歩も走ること能ふまじ、苦しからずバ室内に入り、嚴密に搜索せんと云はれて、靜江ハ漸くに心付きたる事やありけん、父に何をか語げたりければ、父は警吏に向ひて失錯なりしとを語け、空しく退かしめければ、警吏ハ咳きながらに出て去りたり、抑も是れ如何なる誤りより、斯く警吏を煩はせしかと問ひば、靜江ハ傳話器の急報頻りなるに堪へず、器械の働きを止めんとて、誤つて警察署に急變を報ずる鉄線

を引きしかバ、金岡の宅に賊入りたりと思ひ、斯くハ深夜に騒動せしめたるなり、靜江女ハ聞へて面目を失ひ、悄悄として再び我寢室に入り、漸く眠りに就きしかど、夢猶ほ驚きて安眠する能はず、曉に達する頃、纒かに夢を結ばんとすれば、都會の中央とも覺しき處の空中にて、一發轟然と怒電の轉ずる響きに、倏ち夢を破られて、再び眠りに就く能はず、夜ハ己に、ほの／＼と明け渡り、淺草寺の鐘ハ午前五時を報じて、人々皆な寢室を起き出てたり、後ちに至りてこれを聞けば、怒雷の轉ずるかと思ひし一聲ハ、香港へ往返する乘雲船が、出發を報ずるの砲聲にてありしとす

○第九回

裁縫技進んで瞬間服を製し
 步虛館起つて空中宴を張る

金岡夫人の静江女が衣服の風装時好に後れ、何とやら鄙風を帯びて見ゆるより、貴女等と交際をなすにも不都合なりと、翌朝直ちに裁縫師を招き、時好を退ふたる新様の衣服を裁し、午時までに送り來れよと命じければ、裁縫師の静江女の寸尺等を量りて歸りしが、此時静江の心には、如何に裁縫が巧みなりとて、僅か半日間に出来まじと想ひしに、裁縫師の時刻を違はず、正午に近き頃新調したる衣服を送り來れり、その裁縫の緻密にして且つ巧みなるは、匆卒の間に縫へあげたるものとの想はれず、静江の餘りに迅速なるに驚き、母に向ひて裁縫の話説を聞けば、今人智の進むに従ひ、裁縫の工藝までも益す、巧みとなり、昔の如何なる精巧の裁縫器も僅かに一本の針を使用するに過ぎざりしが、

今二本の針にて左右より縫ひ合せ、其の最も巧みなるものは、一時に三本の針を使用するものさへありて、昔の工藝の熟練せざる時に、三人の手を勞したるものも、今一人の手にて容易に成し得ることとなれり、且つ此等の工藝は、皆な婦女子の専修する所となり、男兒にして斯る工藝を業とするもの絶へてなし、殊に此絨の緻密にして美麗なるを看よ、此の實に阿爺が北海道に設けたる製絨所にて織り出せしものにして、近來の多量の毛織物を輸出して、支那以西にて使用するもの、大概我邦の産出に係れり、とて、北海道製絨所の寫眞を出して示められたるを看るに、工場区域の方面に、二里許に亘り、工場建築の壯大なる、七層の大廈にして、綿羊毛を紡績する、工女の現況を寫したるものには、無慮七千

人の夥しきあり、昔日世界の工場にて、最も宏大なるもの、
獨國のグループ氏の製砲場なりと聞きつるが、此二十世紀
の工場にては、恐らく我工場の右に出るものあるまじと、
夫人は頻りに誇られたり
静江女に見るものもなく聞くものもなく、皆なるの盛大に
驚かざるはなく、日々に電氣車に乗りて都下の有様を巡覽
するに、實に目を驚かす事多きが中にも、最も驚くべきは、兩
國橋と新大橋との大鉄橋の空中に、巨大の樓閣を築きし一
事なり、その建築の橋と橋との兩岸に、幾本もなく直徑三尺
もあらんと想ふ鉄柱を建て、其上に五尺角許りなる鉄の
横桁を架し、上の大なる鉄板を平面に敷き詰めて、其上に
又鉄材をもて八層の樓閣を建築し、樓閣の周圍に廣濶な

る遊園を設け、種々の珍草奇木を栽ゑしのみか、最も驚きた
るは西方に富岳を築き、東方に筑波の形を模造して、兩
岳對峙せしめたるの結構なり、此樓閣の歩虚館と名けて、美
酒佳肴の客の望みに應じて、咄嗟の間に調理し、都人遊樂の
仙境と定めたり、その高さの地盤を距ると、一百五十丈に及
び、乗雲船繫留場を設けて、眞に空中の大樓閣を築き出せし
の、想像の外なる有様なり、静江女は此歩虚館に昇らんとて
電氣車を臺下に停め、又も一驚を吃したり、此高臺に昇降す
るに、階段を設るか若くは梯子にてもあらんかと思ひ、
階段もなければ梯子もなし、此の如何にして臺上に昇るべ
きや、鳥翼を借るにあらねば、昇る能ふまじと、暫ばし仰へて
高臺を望み、呆然として居たりしかば、從僕ハ静江女を促か

して、阿嬢に何とて早く臺上に報せぬやと云はれて尙を
も臺上を望めば如何に叫べとも百五十丈の臺上に聞ゆべ
きにあらず、殆んど當惑の態にてありける時恰かも好し男
女十人許りの遊客來り、一の鉄柱の下に何やら傳話器の装
置に類したるものある處に到り、螺旋様のものを捻るや忽
ち臺上の鈴鳴りて、一箇の大鉄匣に均しきものを繰り卸し
たり、遊客の電氣車を倚せて其鉄匣に入るを看て靜江もこ
れに乗込みたれば、恁がて臺上に引き揚げられたり、靜江女
の高臺の上に昇りて看れ、身の高臺の上に築きたる庭園
絶佳なるの言ふべくもあらず、此高臺の上に築きたる庭園
の具に深山の幽邃を寫し、樹木鬱葱として晝猶は暗く、此
陰の扶疎たる處より、斷へず清風を送りて翠嵐の滴るに

異ならず、殊に驚きたる、此高臺の上に大いなる噴水器を
設け、方三十尺もあらんと想はるゝ盆池に溢れて空中に魚
を跳らす、實に一大奇觀たり、抑も如何なる機關の働きに
て、百五十丈の上に水を噴かしむるか、と怪めば、激して躍ら
さば山にもあらしむべしと云ふ如き、迂遠の法に依るにあ
らず、亦是れ電氣の働きにて、宛かも千尋の井底より、噴水法
にて汲みあくるが如く、墨田の水を吸ひ上げしむるの装置
なり、靜江女、此等の結構を看て、覺へず妙と叫び、歩
館の一室を借りて風景の絶佳なるを賞し、酒肴を命じて調
理の味を試みたるに、此館にて、日本固有の調理法をも兼
ね、空中に設けたる盆池の藥より、潑刺たる生魚を捕ひ來り
て、即席に料理したる味の、亦一層美なりと感じたり、又此歩

虚館の八層樓の頂に大なる天文臺を設け、直徑一尺に近
 き大望遠鏡を備へて、來客の眺望具に供へたり、此望遠鏡に
 て東京灣を望めば、港内の船舶の悉く皆な眼界に入り來り
 て、舟子等の衣服の色までをも分明に辨すべく、殊に總房の
 山へ眼下に集りて、蜿蜒たる山脈をも看出すに容易なり、豆
 州地方の層峯重巒も亦指顧の間に翠黛を呈し、眞に是れ廣
 大無邊の庭園を現出するに異ならず、靜江女の觀賞飽かず
 して、夕陽の傾くをも知らざりき
 靜江女の日に々都下を遊覽して、市街の面目を一變したる
 に驚くのみならず、建築の結構闊大にして美を盡くし善を
 盡くしたるもの、到る處に巍々然たるに、最も目を驚かし
 たり九段坂上より舊番町の半バを構込みとして、新たに建

築したる國會議事堂に至て、八年の星霜を費やして漸く
 功を竣へり、十四層の大閣なり、此建築の鎮材と石材とをも
 て築造し、其屋上に備へたる大時計臺に至て、全く雲を貫
 きて突出し、英國の議事院といへども恐く、此結構に及ば
 ざるべし、此建築に費やしたる金額、四千八百萬圓に上り
 たりと云ふ、又皇城の背面に方る處に、諸官衙を建築し、皆
 な是れ壯大なる建築にして、一として目を驚かさざるもの
 へなし、又外櫻田なる舊陸軍練兵所の跡に、大審院、衡平裁
 判所、控訴院等の諸裁判所を建築し、舊丸内と唱へたる八代
 洲河岸邊に、大博物館の建築場となり、實に廣大なる結構に
 して、全世界の森羅万像悉く集めざるへなし、此大博物館に
 附屬する動物園、上野公園より谷中根津の三區に別れ、亞

細亞動物の上野に、歐米動物の谷中に、亞弗利加動物の根津に飼養せられ又大植物園を王子村に設けて博物館に附属せしめたり又築地に設けたる水産物館の如きも規模頗る廣大にして此館内に陳列する魚属の數ハ、幾千萬種にして第十九世紀の社會に未だ發見せられざるもの甚た多しとぞ、

○第十回

砲兵演習に空氣砲行はれ
音樂競争に傳音器を評す

静江女の新橋の空上に長大なる鎮柱を建設したる乘雲船
緊留場に到り始めて乘雲船に乗りて都會の天を飛行した
るときハ身ハ今にも幾千丈を隔てたる地上に墮落すると思はれ、或ハ暴風の爲めに瓦斯毬を吹き破らるゝかと怖れ、

悸々然たるの思ひありしかど、漸く慣るゝに及んでハ、海上を航する船よりも穩かとなり、乘雲船にて遊行するもの、爲めに大遊園を開きたる上總鴻の臺又ハ加納山などにも、自から機關を運轉して容易に往來し得らるゝととなり、一日下總の天に遊行して、又もや驚きたる一事あり、此日の新式砲兵隊の野營演習ありて、恰かも好し五大隊の砲兵今も陣營より繰り出す時なれば、静江女ハ地上を距ること僅々二十丈許りの處に降りて船を停め、演習の有様を眺めてありけるに、忽ち一聲轟然と天地に響きて野戰砲を發出し、其の鎮丸ハ静江女の乗り居たる乘雲船の下にて破裂したり、静江女の驚きて船首を轉じ、幸ひにして負傷はせざりしかど、此破裂丸の製法ハ如何なる新發明に係るにや、彈力最

も猛烈にして、その裂片は凡る三四四方に飛散じたり、静江
女は更に乗雲船を中空に昇ばせ、危険ならざる處にて機關
を停め、尙も演習の有様を傍觀するに、戎器の精巧と兵士の
熟練に因りて然るにや、一秒時間に數丸を發出し、その迅速
なること、曾て近代の歴史上にて聞き及びたるグルツプ砲
や、ダイムストロング砲など云ひるものとの比すべきにあ
らず、殊に驚きたるは火薬を用ゐずして、此大砲を發射する
の妙術にぞありける、此は空氣砲と云ひるものにて、空氣の
壓力にて彈丸を發出し、彈丸の砲口を出るまでの摩擦力に
て彈丸に電氣を生せしめ、而して其速度は近くも九百ヤア
ードの距離に達するまでにおよびしといふ、此は佛蘭西人
エフレ、チュツス氏の新發明に係り、最も狙撃上に便利を與ふ

るものにして、紀元二千五十一年、佛國が獨國と第三回の復
讎戰を開き、地中海にて獨の甲鉄艦數艘を打碎きたるは、全
く此空氣砲の働きの係るとかや、且つ火薬を裝入する舊製
砲と異なり、砲身も甚た輕便にして、乗雲艦中に備ふるに、
最も適當なりと云ふ、今や一の砲隊にして、猶斯の如きの進
歩あり、兵事上一般に面目を改めて、益すく熟練したるは
推して知るべきなり、
静江女は空氣砲の巧みなるに驚き、思はず、演習を終るまで、
眺め續けて居たりしが、日ハ巳に西山に暮きて、晚鴉啼に歸
るに驚き、急ぎ空船を馳せ廻へさんとして、機關の運轉を始
じめたるに、會は東風の速度甚だ急なるに乗せしかば、船の
彈丸の飛ぶが如く、忽ちにして東京に達し、最早千住驛に近

かゝらんとする處に達し、甚しく急行せしめたるより、機關
 を損じて復た思ふ方位に向て進む能はず、静江女の狼狽の
 宛がら狂する如く、頻りに焦燥て船を止めんとすれども、風
 力甚た急に於て、アレヨと叫ぶ中に、船次第に西北西
 に吹き流がされ、此勢にて何くまで飛行するも知るべか
 らず、今日も早や已に全く没して、薄暮に近き頃なれば、静
 江女の生きたる心地もせず、若しも大喬木の上に吹き墮さ
 れんに、性命も覺束なしと、面色は蒼然として助けを乞ふ
 聲さへも出てざる危急の場合となりけるが、幸いにして船
 の皇城内なる舊本丸の上に設けある御領の乗雲船繫留所
 の空中を馳せ過ぎんとしける時、侍從官等が枋木縣なる
 日光山にて空中銃獵を試み、今しも乗雲船を飛ばして歸り

來るに遇ひ、緩かに此危急を救はれたり、静江女の繫留場の
 上に降り、ホッと一息突きツ、も猶四方を眺れば、此繫留場
 の鎮柱をもて樞門の如くに築きしものにて、其高さ三十
 丈に下らずして、都會の市街を一目に看おろし、眺望の佳な
 ること云ふばかりもあらざれど、斯る高臺の上に立ち
 しどきの、足も自らの震ひて慄然たるの思ひあり、此臺上に
 昇降するには螺旋形に廻りたる鎮板の階段に由るものに
 て、静江女の漸くにして地上に降り、墨陀の別荘に歸るを得
 たりしとぞ
 金岡氏の非凡の人傑にして、亞細亞東部に比類なき、大財産
 家なるをもて政治家となく、商業家となく、又は學士となく
 技術家となく、苟くも世に名を知られたる者、皆な争ふて

交りを結ばざるのなし、去れば、愛女静江の歸京を聞き、爲めに書を寄せて饗宴を開くもの、朝野の間に絶へずして、静江の日々に處々の宴會に招かれ、後ちに心に煩はしと思ふ程なれば、多くの病ひと稱して、辭せしかば、一日金岡氏の親友にて、大政治家の名ある、安野某氏より招待せられたり、此日の安野氏の第四十二回の誕辰に當るをもて、親戚朋友等數十名を招待して盛んなる夜會を開き、金岡夫妻も愛女静江を伴ひて、午後の六時より電氣車を馳せ、此夜會に赴きたり、主人安野氏の財産にも裕かなる、有名の紳士なれば、此夜會には來客を満足せしめんとて、鄭重なる饗應をなし、此日の割烹の調食會社の最も盛大なる甲社に命じて調理せしめ、珍味佳肴一として旨からざるのなく、充分の饗應なりし

かど、時世の進歩するに隨ひ、飲食も亦自から奢りを争ふの有様にて、乙社の調理の尙一層美味なりと稱して、主人の心に不快を感ぜしむるものありしも、畢竟の何事にも競争の盛んなるが故なるべし、宴已に開くに及んで、主人安野氏の談偶ま音樂の巧拙に及び、氏に頻りに甲音樂會社の最も巧みにして、能く人を感動せしむるを賞賛し、甲會社の音樂を聞くもの、奮々に嘲哢たる音聲の妙絶なるに感ずるのみならず、精神も亦自から爽快を覺ひ、云ふべからざるの佳境に入らしむ、此樂譜の専ら英國の音曲に倣ひしものにて、蓋し世界に冠たりと云ふべし、金岡氏に此話説を聽きて、少しく心に不快を感ぜし顔色にて、甲會社の音樂の實に妙絶と稱して、可なり、然れども

余ハ乙會社の右に出つべしとハ想はれず、甲會社の妙ハ則ち妙なりといへども、唯だ英國の樂譜と音聲を移し來ると云ふに過ぎず、矧してや未だ天地鬼神をも感動せしむるに足らざるや、乙會社の然らず、亞細亞固有の樂譜を基礎として、歐洲樂風の最も美なるものを選びて之れに粧飾を加ひしものなり、故に内外人をして深く感動を起さしめ、音聲の急なるときハ切々として、潤泉の咽々が如く、自から悲哀の情を起さしめ、音聲の緩なるときハ嫋々として、松濤の起るが如く、自から清肅の感を惹かしめ、其抑揚に至てハ柔弱ならず、激昂ならず、眞に八音調和して、天地の氣に合し、君子國の樂に愧ぢずと云ふべし、音樂の妙處ハ元と人の心を和らげ、自から愉快を感ぜしむるにあり、去れば唯だに音

聲の妙のみを取るべきにあらず、要するに能く其國の情に適して、深く感動力を起さしめ、英雄豪傑の心をも和らげて、嚙啗たる妙音耳に上るときハ、無何郷に入るが如きの感あらしむものにして、始めて音樂の妙處を得たりと云ふべし、唯だ宮商調和して、樂譜に合するのみを可なりとせば、少しく樂器を弄するものハ皆な能く伶人たるを得べし、我古代の英雄が、月下に簫を弄して、山川をも感ぜしめしと云ふが如きハ、歴史上に乏しからず、是れ妙中に妙を得たるものにあらずして、豈に此に至るを得んや、且つ余の精神ハ、飽くまでも、獨立主義を貫徹するに在るをもて、我日本ハ日本の國風を保存し、歐洲の美事を採て我短所を補ふと云ひ、我ハ歐洲の美事を使用するも、歐洲美事の奴隸たるべからず

第十世紀の歴史を讀みたるもの、果して如何なる感覺を起こせしや、歐洲人と云ひば、固より及ぶべからざるものと、して我より數歩を譲り、學藝と云ひ技術と云ひ争ふて彼が誇る所に倣ひし、彼を使用して我文明を進步せしむるに、あらず、全く彼が奴隸と爲て彼が後へに従ひ、宛かも乳兒の漸く歩を學ぶが如き有様を呈したりき、我既に自から彼が奴隸たるを甘んぜり、彼常に我を侮りて陸梁を加へたるも、亦何を怪むに足るべきや、是れ第十九世紀の東洋人が歐洲人の下風に立たざらんとするも、竟に能はざりし緣由なり、きと云ふべし、今や印度人といへども、斯ふる卑屈の心を抱き、復た歐洲人の奴隸たるものなし、否な我れ倒まに彼をして、我奴隸たらしめざれば未だ満足すべからざるにあらず

や、音樂の如きは最も此點に關係あるをも省みず、我國風を廢して全く英に倣はんとする、乃ち是れ彼が奴隸たるものにして、彼が美藝を使用すと云ふべからず、乙會社の窓に音調の妙絶なるのみならず、専ら此點に注意して、獨立上より今日の進歩を致したり、余の願くは我樂風をして、皆な此風に倣はしめんこそ望ましけれと、憚る色もなく滔々と我持論を述べたるに、安野氏の苦み切つたる顔色にて、音樂の元來人耳を樂ましむる一の玩弄物たるに過ぎず、何ぞ此玩弄物に向て主義の如何を問ふの要用あるべき、唯たに聽ひて愉快を感じせしめ、可なりと抗辨したる語氣も亦甚た鋭く、到底甲會社に敵すべきものなしと主張し、金岡氏の否な玩弄物にあらず、世の文明を進むるに、最も要用なる道

具なり、故に其樂を聽ひて其國風を知ると云ひる古語さへあり、其國風姪猥に流るゝとき、其樂も亦自から姪聲を帯び其國風道義に厚きとき、其樂も亦自から清肅なるの争ふべからざるの勢理なりと説き、互ひに屈するの色見へざりしが、安野氏、然らば今日甲會社より送り來る音聲を聽ひて、諸君の公評を仰ぐべしと云ふ一語にて争論を止めたり、靜江女の父が強情にも主人の説に抗抵して、喋々言を止めざるを見て、主人に對して氣の毒なりと思ひ、一隅に身を寄せて默然として居たりけり
主密緩かに争論を止る時しも、恰かも好し甲音樂會社の、曉々然として音聲を送り來り、一坐の肅然として耳を傾け、稍や妙處に至らんとする時、音律俄かに亂れて緩急度を失ひ、

宛がら雜樂を合奏するが如く、聞くに堪へざるの不調子なり、主人安野氏、今まで口を極めて甲會社を稱せしに、斯る不慮の變動あるに面目を失ひ、想ふに是れ會社の伶人等が、社長に對して何をか怨みを含み、會社の名譽を傷けんとして、故らに音律を紊亂せしめたるものならんか、去るにても餘りとは聞き苦しと、悄然たる顔色あるを看て、金岡氏、尙も憚る所なく甲會社の不規則なるの擧て論ずるに足らず、是れ獨立の氣概なきが故とこそ想はれたり、偕々聞くも氣の毒なりと評する時、音聲俄かに絶いて復た何の音をも送らず、主人安野氏、來客に對しても面目を失ひ、且つ此の謝しき事なりしとて、急かに一僕を會社に遣はして不都合を詰らしめんとせり、此時會社の役員、息も絶へく、に馳

せ來りて、一向に謝するを聞けば、何者とも知れず、敝社の傳音線を絶斷して、他の數社の傳音線と接続せしめしより、斯る變事を來たしたり、敝社の音聲の漏るゝに驚き、人を四方に馳せて巡檢せしめたるに、果して此變事ありき、想ふに是れ敝社の日に盛大に赴くを嫉み、斯ふる妨害をなしたるものと想はれたり、敝社の之れが爲めに巨額の損害を蒙りたれば、會社條例に照らして其筋へ告訴に及びたり、不日行害者を偵捕して、願主諸君に謝し奉らんと、再三陳謝して歸りける、會社の直地に修繕を加へしものと看へ、忽ちにして音聲を送り來り、主人も漸く面目を復したり、近來諸會社の競争は、日に益すく甚し、往々斯ふる變事がある、社會事物の進路に於て、亦免れ難きの疾病なりと云ふべし、

○第十一回

宴會に招れて時世談を聴き、空船に乗つて煙火戲を試む。宴既に酬へにして、來賓の各々佳境に入り、或は舞踏場に往ひて、妙齡の佳人と手を携ひて舞踏するものあり、或は瑤欄に凭りて、活潑の壯士と頻りに時事を談論するものあり、或は相場會社の輪贏に關し、物價の亂高下、文明市場の名譽を害すとして慨嘆するものあり、或は工場の大盛を計るゝ、東洋の富源を擴るゝの急策なるをも省みず、財産家が猶資本を貸し吝むの有様ある、前見に暗らきも甚だしと説くものあり、又或は時世の進歩する割合に、獨り進まざるものあり、哲學にして、宗教家の依然として舊套を因襲し、絶へて活潑の氣力なく、彼の空説に惑溺して眞理を究めざる佛教徒が、

年々に衰ひ去つて氣息奄々たる可憐の有様を呈し、今や基督教徒の爲めに壓倒せられて復た振ふの勢なきは、亦猶印度佛教が巴羅門教の爲めに蹂躪されしが如し、去れども基督教徒といへども、猶未だ充分の勢力を得たりと云ふべからず、此第二十世紀の聖僧高師が信徒の洗禮を受るに却て敬神の誠意に悖ると云ふべし、人類の世に生れ出る時、乃ち神の人類を造り給ひて、始めて像を形すの時なれば、此時よりして人皆な我教徒たるに正理の許す所なるに、又何ぞ洗禮を用ゐて更に教徒たらしむるを要せんやとの新説を唱ひ、全世界の人類をして、悉く皆な我教徒たらしめんと試み、我日本の基督教徒も亦頻りに此説を主張して、佛敎徒を凌ぎ、全國幾千萬の佛刹、或は廢され或は倒れて、其數を

滅じたること驚くに堪へたり、今猶僅かに存するもの、歴史上の參觀として保存せらるゝ、古佛閣等を除くの外は、無學無識の野民の爲めに養はるゝ、僻地寒村の山刹を看るに過ぎず、佛敎の斯くまでに衰ひたる今日にありては、人皆な基督教徒たらざれば無宗旨たらざるを得ざるの道理なれども、本年哲學會院が報告したる、我邦基督教徒の數を看れば、僅に二千八百萬人に過ぎざるは、亦是れ怪むべきの一事ならずや、哲學の振はざる亦以て徴するに足る、哲學の道徳破壊の堤防として社會に必要なるは、今更に喋々の辨を俟たず、統計會院が本年五月會員に頒布したる統計雜誌に據れば、醜行者と破徳者の數を増したると幾んど千人に三人半を出すの割合なり第十九世紀の歴史に醜點を留めたる、

社會道德破壊の罪人たる最も忌むべく最も賤しむべき娼妓藝妓の類ハ此第二十世紀の社會にハ全く其跡を絶たしめたるも猶且つ破德者の小星となりて賣淫に均しき醜業をなし、怙然として愧ぢざるの婦人あり、又良人に向て濫りに離別を請求する婦人の少なからざるハ女權を誤解する無學婦人の新弊に係るとハ云ひ、此等の弊ハ皆な是れ哲學の振ハざるが故なりと頻りに哲學論を唱ふるものあるハ、蓋し今日の夜會に列なりたる賓客の中にも、間々醜聲を流かすものあるを戒たるものと思はれたり、
金岡氏の有名なる狀師某氏と相對して、政治上の談話を開ハし、互ひに持論を吐き出して、笑語の聲頻りなり、此某氏と云ひるハ頗る活潑なる偶才子にして、年齢ハ未だ四旬に滿

たざれども、東京撰擧區の候補者となりし人物なり、某氏の現内閣の反對に立つ者にして、痛く保守党を攻撃し、一昨年我改進黨内閣の失敗を取りて、遂に顛覆されたるハ、全く支那共和党を助くべしと主張したるに係り、當時保守党ハ支那共和党を目して決して獨立し得べきものにあらずと極論し、改進党ハ北米合衆國の獨立に際し、佛國が合衆國の獨立を認め、援兵を送りし古例を引き、喋々支那共和党の舉兵を賛稱したれども、保守党は猶頭を掉り否なく、支那本部の人民は元來懶惰無爲の人民なり、豈に能く獨立の目的を達し得べけんや、改進党ハ共和党の首領劉元成氏を目して、米の華盛頓に比し、佛の顔比多に較ふれども、到底同日の人物にあらず、殊に支那ハ古來帝國を以て因襲し來る國柄

なるをも省みず、輕忽に共和党の請願を容れて、愛親覺羅氏
と怨みを構ひ、剩さへ爲めに八千萬圓許の軍資を費やさん
とするの、我日本の得策にあらず、否な改進黨内閣の東洋社
會を破壊するの罪人なりとまで、猛烈なる攻撃を加へ、我
改進黨の不幸にも遠征案を廢棄せられたり、現内閣の劉元
成氏の竟に宿志を達し、大共和国を創立するに及んで、我
先見の暗きを悟り速かに辞表を呈すること男兒の本意た
るべきに、猶百方我非を彌縫して、信用全く地に墜ちたる腐
敗の内閣を維持せんとするの、寧ろ一笑に附し去るの外、他
に評する所を知らず、殊に笑ふべき、近來女党の稍や権力
を得たるを奇貨とし、此軟弱党に利を啗らせて、腐敗内閣の
縷々たる命脈の保護を依頼したるの一事なり、此軟弱なる

女党等が果して如何なる働きをなし得べきや、女郡長等が
施す手段を聞けば、容顏の麗しきと、媚笑の巧みなるを
待み、以て壯士輩を籠絡せんとするに過ぎず、請ふ思ひ、第
十世紀の男兒にして、豈に女色に迷惑されて國事を誤るも
のあらんや、噫、現内閣の維持の手段全く尽きたり、活動の精
神已に死したり、然らざれば何を苦んで軟弱謀るに足らざ
る女党に依頼すと云ふ時、金岡氏の夫人の此處に來らんと
するを看て、忙しく某氏の袖を引き右の談話を中止せしめ
たり、蓋し金岡夫人の専ら女党の爲めに奔走し、金岡氏とい
反對の地位に立つが故なるべし、
靜江女此等の談話を聴き、社會の人氣の何事に拘らず、皆
な活潑となりしに驚き、吾身の久しく僻地に居り、時世後れ

となりしをもて、出す言葉もあらざれば群れを離れし孤雁の如く、樓上の鉄欄に身を貸せ黙然としてありける時、中空にて一聲轟然として何物か破裂したるの響きあり、静江の又もや驚きて、急ぎ空中を眺れば、是れを響應の爲めに打揚げたる煙火にて、金星銀星爛々と光りを放ち、喝采の聲の止まざりけり、又も打揚げたるの残月の火柳の上に懸るあり。流星の碎けて狂龍となり玉を吐いて下るあり、その奇觀目を驚かして、一層興を添ひたりける、殊に衆目を驚かせし、中空に大いなる火虎火象などの形物を現はしたるにぞありき、斯る盛大なる煙火の戯れ、静江の目より看れば、最も目新らしく、覺ひず聲を發して驚したり、去れば目も放たず、中空を眺め居たるに、漸くにして此煙火の技術尋常なら

ぬを見出したたり、此煙火の地上より打揚げたるにあらざりて、天上より打卸ろすかと思はれたり、何となれば地上より打揚げたる響きなく、唯た破裂する時一聲轟然と響くのみなり、珠に驚きたるは、中空に大いなる形物を現はしたる手際なり、曾て静江が幼年の頃、兩國橋の下にて打揚げたる煙火を観るに、その装置は微々たるものにして、形物と云ひば船中にて竿頭に掲げながら火を傳ふるに過ぎざりき、彼と是れと大いなる相違にて、是れは地上を距る一百丈の高さに打揚げ、大いなる形物さへ現はす、亦是れ空筒にて打揚げたるかと思ひ、絶へて彈の影看へず、唯た奇なり、妙なりと賞するのみ、此新技術を解し能はぬも道理なり、此煙火の都下にて一二を争ふ煙火會社の製造に係り、中空に

て百貫目より二百貫目までの大弾を破裂せしむるの法な
れば、火の一丁四方に散亂し、真に満天の星を一包みとして、
之を一時に撒き散らすに異ならず、抑も斯る大煙火を揚
けて、絶へて火災の憂ひなきは、昔日と異なりて、今、地上よ
り打揚るにあらず、全く乗雲船にて天上より釣り卸ろすが
故なり、乗雲船を中空適宜の處に停留し、煙火弾を鉄線にて
繋ぎ、鉄線の端に煙火弾を納るべき堅固なる鉄網を結び、
此内に煙火弾を装入し、銃線をもて適宜の處に釣り卸ろし、
電氣をもて發火せしむるの法なれば、弾の破裂するも其壳
の飛散するとなし、且、打卸ろす位地の高低は、顧主の望みに
任かせて定ることなし、如何なる巨大の形物を現はすも、
自由自在にして、驚くにも足らぬ容易の技術なり、去れども

人智の未だ開けざる舊世界に、木筒などを擔ぎ出し、火薬の
力を借りて僅かに地上より打揚げたる、迂遠の技術に比ぶ
れば、人智の働きとも想はれぬ程にして、静江の驚くも亦宜
べなりと云ふべし、此夜來會の賓客は、各々充分の歡びを罄
くし、煙火の戯れ終るを期として散じ去り、静江も父母に伴
ふて、夜の十二時に近き頃、墨陀の邸に歸りけり

○第十二回

政治研究所に俊才を育し
演説講習課に辨論を教ゆ

第二十世紀の今日、社會の事業日に一日と繁忙になり自
から男女分業の有様を呈し、醫師、狀師、大概婦人の専業と
なり、紡織、塲裁、總師の如きは、婦女を以て十が九分を占るに
至れり、天下不具人を除くの外は、貴賤貧富の別を問はず、皆

な常業に就かざるのなし、偶々傾情放佚にして、常業を執らざるものあれば、人皆な侮り賤んで社會の交際より除かれ、唯た一心に事業を營むをもて名譽となすに至れり、去れば金岡夫妻の静江女の碌々爲す事なきを看て、父母の恥ぢとなし、朝な夕なに静江の意見を問ひども、元來柔弱なる性質にして、氣概に乏しき少女なれば、一として量見とすべきものなく、徒らに遊び暮らすをもて、結局安樂なりとするの有様なれば、父母の頻りに氣を揉みつ、何なりとも望みあらば云ひ出でよと、幾回となく促がせども、何も事業に望みいなし、唯た父母の命のまゝに身を置かんと、到底自から奮つて事業に就くの氣樂なし、假令ひ遂げざるまでも誘導せんと、父の醫術を學ばしめんと勧め、母の大いに意見を異にして、

醫術の學期も長ふして卒業も難きのみならず、開業するも世人の信用を得る迄には、容易の事にあらざるべし、妾の寧ろ政治家となさんころ望ましけれと、蓋し夫人の意見に、女党の漸く勢力を得たるに乗じ、静江をも一箇の政治家たらしめなば、我主義を貫くの助ともならんと思ひ、斯くの醫業を拒みしと思はれたり、夫人の政治學に長じ、最も老練家の名譽高き名和治長氏との親密の交際を結び、氏の政治學會にて設立したる、政治研究所の校長となり、専ら俊才を陶冶せらるゝをもて、夫人の氏に静江の入學を依頼せり、氏の快く承諾をなし、余の女權伸暢家の一人なれば、女生徒の増加するの、殊に余が名譽として喜悅する所なり、當今生徒は満員にて、新入學を許し難き場合なれども、特別の詮議を以

て、令嬢の入學をバ許すとに幹旋すべし、去れども本費に入學する者の、普通の政治學科を卒業したる者に限り、卒業免狀を所持せざる者の、縦令嬢の子弟たりとも、斷乎として入學を許し難たし、令嬢に何れの學校にて修業せられしや、定めて卒業免狀を所持せらるべしと、問はれて夫人の少しく當惑したれども、漸くにして言を發し、否な少女の地方の學校にて教育せられ、政治學専門の免狀を得ざれども、妾が面前にて試験したるに、普通の政治學に達したりき、願くは特別の譯けを以て、入學を許されたと、名和氏の金岡夫人の女丈夫たるを信ぜしかば、其女と亦必ず俊才ならんと信じ、遂に入費の事を許されたり、夫人の校長の承諾を得て大いに喜び、愛女をして都下の區

長にも任せしめなば、我名譽までも幾分か光榮を添ゆべしと、家に歸りて靜江に入費の事を告げたるに、靜江の案に相違の顔色にて、靜江「政治研究所との、如何なる事を研究する處にや、母、愛女に何を云ひ侍るぞ、問はずと知れた、政治家となるべきものを教育する處なるに、靜江「去れば妾も亦政治家となれと云ひ給ふにや、母「知れたるとよ、天晴れ大政治家と爲て、天下に名を揚げられよ、と、云はれて靜江の大いに驚き、政治の事、婦女の與る所にあらず、矧して政治學の一端も學ばざる吾身にして、如何で入費のなるべきや、程好く辞するに如かずと思ひ、靜江「政治學など、の思ひも寄よらず、好しや政治學を修